

少年期の徳富蘇峰とアメリカ —1863～1880年—

澤田次郎

はじめに

- 1 アメリカの知識を得るまで
 - 2 アメリカとの接触—熊本洋学校時代
 - 3 アメリカへの敬意—同志社英学校時代
 - (1) 高貴な精神をもつアメリカのイメージ
 - (2) フランクリンとピーチャーによる刺激
 - (3) ラーネッド、ウールジーの学問的影響
 - 4 アメリカへの嫌悪感の萌芽
- おわりに

はじめに

徳富蘇峰(1863～1957)は近代日本を代表するジャーナリスト、歴史家として知られている。明治中期から昭和戦後の六十年以上にわたって、蘇峰は日米関係やアメリカ外交につき言論を展開し続けた。日露戦争終了時までアメリカに強い好意を示したかれは、戦争後、とくにカリフォルニアの日本移民排斥運動に反発してアメリカへの嫌悪感を深め、日米戦争中は米英撃滅を主唱した。¹ そうした活躍期の蘇峰を知るためには、その人生の原点に立ち返る必要がある。壮年、老年期の心の原型は青少年期に作られよう。若き日の蘇峰はアメリカについてどのようなことを学び、いかなる感情を抱いたのか。この「アメリカ」と出会った原体験を知らずして、後年の言動を解明することはできない。

1. 三輪公忠「皇室中心主義と生物学的決定論による日米戦争不可避論—徳富蘇峰の場合—」三輪『隠されたベリーの「白旗」日米関係のイメージ論的・精神史的研究』(Sophia University Press 上智大学、1999年)所収、拙著『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心に』(慶應義塾大学出版会、1999年)。

蘇峰は文久3年(1863)、肥後国で生まれ、水俣ついで熊本市郊外の大江村で成長した。² いくつかの私塾に入って漢学を習い、家庭においては日本の史書を愛読した後、明治8年(1875)に熊本洋学校に入学する。³ アメリカ人教師リロイ・L・ジェーンズと出会い、はじめてアメリカ風の教育を受けた蘇峰は、さらに9年から13年にかけての約三年半余り、同志社英学校で新島襄や、ドワイト・W・ラーネッド、ジェローム・D・デイヴィス等のアメリカ人教師、宣教師から学ぶことにより、アメリカという未知なる世界に心を開いていった。すなわち、現代でいうと小学生の年齢で漢籍や和本を通じて江戸期の伝統的教養を吸収し、中学から高校生の年齢で熊本洋学校、同志社英学校に入り、和漢の学問の上にアメリカの洋学を接木する形で採り入れたのである。このように伝統と洋学が接触する中で、蘇峰の眼前に現れたアメリカはどのようなものだったのだろうか。

本稿の発表に先立ち、筆者は熊本・大江義塾時代(明治13年秋～19年末)における青年期蘇峰のアメリカ観を検討した。この時期の蘇峰は西洋列強とくにロシア、イギリスのアジア進出に危機感を覚え、日本の独立と近代化を念願したが、その際、アメリカは高貴な独立の精神にもとづいて建国され、自由民権をベースに商業立国を実現した

2. 蘇峰の経歴は、和田守編「年譜」植手通有篇『明治文学全集 34 徳富蘇峰集』(筑摩書房、昭和49年)所収を主として参照した。ただし年齢については、数え年でなく満年齢で表記した。なお徳富猪一郎が「蘇峰」の雅号を用いたのは明治20年(1887)2月の『国民之友』創刊以降であるが、本稿では便宜上、蘇峰の名で統一した。

3. 後述するように、蘇峰はそれ以前に一度熊本洋学校に在籍したことがあったが、一ヶ月ほどで退学している。ここで述べているのは二回目の入学である。

日本のモデルとしてイメージされた。⁴ このようなアメリカ像は熊本・大江義塾時代に突然表れたというよりも、その前段階の時期より形成され始めていたのではないか。そこで本稿では第一に、生涯から少年期に至る蘇峰のアメリカ像形成の発芽を探ってみたい。ただし同志社時代の蘇峰の文章には断片的なものが多い上に、同志社以前については文章自体がほとんど残されていない状況である。そこで蘇峰の書き残したものだけでなく、かれが読んだ教科書や新聞記事にまで考察を広げ、その中で展開されるアメリカ像を検証し、蘇峰をとりまくアメリカ的世界を明らかにした上で、熊本・大江義塾時代の蘇峰が示した対米イメージとの関連性を探ってみたい。

熊本洋学校、同志社英学校時代の蘇峰については、すでにいくつかの優れた研究が発表されている。⁵ しかしながら、若き蘇峰とアメリカの関係に焦点をあてた論考は管見の及ぶ限り、ほとんど見当たらない。その中で杉井六郎氏の『徳富蘇峰の研究』は蘇峰におけるキリスト教受容の問題を深く洞察し、それと関連してアメリカの有名な牧師、説教家であったヘンリー・W・ピーチャーの著述から蘇峰が感化を受けた点を指摘している。⁶ ただし杉井氏は影響の具体的内容にまでは踏み込んでいない。そこで本稿では第二に、この杉井氏の提起した問題を検討し、新たに判明した点を加えてみたい。⁷

4. 拙稿「徳富蘇峰とアメリカン・デモクラシー—自由民権運動後半期を中心に—」『法学研究』74巻7号(平成13年7月)を参照されたい。
5. 主なものとして、杉井六郎『徳富蘇峰の研究』(法政大学出版局、1977年)、John D. Pierson, *Tokutomi Sohō 1863-1957: A Journalist for Modern Japan* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1980); 日永朝子「初期同志社における新島襄と徳富猪一郎」『政治経済史学』第264号(昭和63年4月)、伊藤彌彦『のびやかにかたる 新島襄と明治の書生』(晃洋書房、1999年)、本井康博『新島襄と徳富蘇峰—熊本バンド、福沢諭吉、中江兆民をめぐって—』(晃洋書房、2002年)などがある。
6. 杉井『徳富蘇峰の研究』の第二章「蘇峰におけるキリスト教—蘇峰における文明開化—」82-84、111-12、116頁。花立三郎、杉井六郎、和田守編『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』(三一書房、1978年)所収の杉井氏による解説(831-33頁)も参照のこと。以下『資料集』と略記。

考察期間は文久3年の生誕から明治13年の同志社退学までの十七年間である。ただし、同志社での学問的、思想的蓄積はその次の段階である大江義塾時代前後に表面化することが少なくないため、その時期にも部分的に言及することとする。

1 アメリカの知識を得るまで

熊本洋学校でアメリカ的な教育に触れる前に、蘇峰はどのような家庭に生まれ、幼少年時にどういった価値観を身につけていたのだろうか。蘇峰とアメリカについて筆を進める前に、この点を一瞥しておく必要がある。

水俣に根拠地を置く徳富家が郷土、豪農、商家など様々な側面をもつ地方名望家であったことはよく知られている。蘇峰自身、「私共の家は、侍でもなく、百姓でもなく、町人でもなく、全くの合の子でありました」、あるいは「一家にて、士でもあり、農でもあり、商でもあり」と述べている。⁸ 従来、研究者の間ではこのうち豪農出身者としての蘇峰に焦点が当てられがちであった。そうした観点が重要であることはいうまでもない。ただし、その他の「士」あるいは「商」としての側面も見逃すことはできない。ここでは蘇峰を生んだ徳富家の「士」の側面にも着目してみたい。

まず徳富家の経歴を簡単に見ておくと、同家は江戸期を通じて名字帯刀を許された郷土であった。初代忠助は、寛永9年(1632)に細川忠利が肥後に入国した後、同14から15年(1637~38)の島原の乱の際に細川軍に従軍している。徳富家はその後、四代一延に至るまで「御郡筒小頭」を世襲したが、水俣を含む芦北郡は相良藩、薩摩藩と国境を接する重要地であり、御郡筒には平時、農業に従事し、

7. なお蘇峰に焦点を当てた論考ではないが、当該期を含む日本知識人のアメリカ像を考察した亀井俊介氏の一連の研究があり、その中でもとくに『自由の聖地—日本人のアメリカ』(研究社出版、昭和53年)、『メリケンからアメリカへ—日米文化交流史覚書』(東京大学出版会、1979年)は示唆に富み、本稿を執筆する上で大いに参考となった。蘇峰の少年期、日本言論界に支配的であったアメリカのイメージはこれら亀井氏の著書が明らかにしている。

8. 徳富猪一郎『わが母』(民友社、昭和6年12月)、5-7頁。

あるいは郡中の土木工事を務める他に、国境警備、他藩に対する防衛、郡内の治安維持、重要人物通行の警護などの任が課せられていた。四代一延は家僕が誤って犯した罪の責任をとって切腹したが、徳富家中興の祖といわれる五代久貞(1738~1818)は「一領一疋」(両刀の他、鎧一領と馬一匹を所持。足軽より上)に昇格し、水俣北隣、津奈木手永の「御惣庄屋」に抜擢された。御惣庄屋は熊本藩独特の行政職で、会所役人を指揮し、手永内の村々の「庄屋」「頭百姓」を統括し、手永内の行政、納税、警察その他の業務を処理した。水俣から津奈木に出張した久貞は「人民[ママ]教育第一」との使命感をもち、村民に質素勤勉の徳を説くとともに、洪水を頻繁に起こす津奈木川の改修工事については久貞以下、徳富家が三代にわたって尽力している。御惣庄屋を引退した久貞は、文化5年(1808)、学問と武芸の双方を教授する水俣書堂を建設して郷土の子弟の教育にあたり、その後、六代貞申(1770~1810)、七代美信(1798~1885)も同じ津奈木手永の御惣庄屋を受け継ぎ、蘇峰の父、八代一敬(1822~1914)は芦北郡の横目(郡代に属する取締役人)を務め、さらに海岸防備を研究し、西洋の軍事力に関する情報を集めるため長崎と鹿児島に派遣された。⁹ 藩命を受けて種々の交渉にあたったという一敬は、先行研究によると肥後の一豪農と見くびることのできない幕末国事に関する経験を蓄積していたという。¹⁰ その他に一敬が熊本藩校時習館で修学した後、弘化2年(1845)に横井小楠の門下生となり、最古参の弟子として師から深い信頼を受けたことはよく知られている通りである。

以上のように蘇峰の父祖は「農」「商」の側面をも

9. 蘇峰の先祖については、津奈木町誌編集委員会編『津奈木町誌』上巻(津奈木町、平成5年)所収、岡松壮一郎ほか執筆「近世」の項が詳しい。ちなみに同書の下巻は発刊されていない。また岡松氏が中心となって刊行した城後尚年監修、七浦古文書会編、芦北郡史料叢書第五~七集『徳富家文書』(一)~(三)(七浦古文書会、平成14年7月、13年10月、14年2月)は久貞、貞申、美信の事績を知る上で貴重な史料集である。その他に、徳富猪一郎『蘇峰自伝』(中央公論社、昭和10年11月第五十版)、Pierson, *Tokutomi Sohō*; 水俣市史編さん委員会編『新水俣市史』上巻(水俣市、平成3年)を参照した。

10. 『蘇峰自伝』5-6頁、杉井『徳富蘇峰の研究』176頁。

つと同時に、時には戦闘や国境警備に従事し、あるいは自己の責任をとって切腹をし、とりわけ五代以降は民の指導者として公に尽くす責任感、儒学の素養を兼ね備えた知識人であり、さらに父一敬の場合は幕末に国事を体験するという面も有していた。このように義務感を抱き、私よりも公に奉じる志をもつ、良い意味での「士」の要素を備えた徳富家の伝統は、西洋列強のアジア進出を背景に強い使命感と言論によって国民を率い、「文章報国」の生涯を歩んだ蘇峰に受け継がれているのではないだろうか。同志社時代の蘇峰は、自分が「慨然天下ヲ憂へ」る「頼母敷人物トナリ、以テ輿論ヲ導ク様ニナシ給へ」、「身ヲ以テ国ニ任スル様ニナシ給へ」とくり返しゴッドに祈りを捧げているが、¹¹ こうした気概を生み出す源泉の一つとして「士」としての徳富家の家風があるのではないかと考えられる。肥後の郷土が城下に居住する熊本藩土と地位や性質を異にすることはいうまでもない。ただし蘇峰の人物を考える場合、豪農出身者、平民主義者という側面と同時に、こうした「士」としての側面も合わせ見る必要がある。¹²

上記のような伝統をもつ家庭に生まれ育った蘇峰は、幼少年期にどのような読書経験を積んでいるだろうか。当時のかれの愛読書は『蘇峰自伝』や『読書法』(原題『読書九十年』)などにあげられているが、¹³ そこにある蘇峰の読んだ書物の内容を一つ一つ検証してみると、おおむね以下のようになっていることができる。まず蘇峰は君子の道と実践的道德を説き、治国平天下をめざす儒学を思想を吸収していった。幼少年期のかれは、漢学塾に入る前の幼児のうちから『大学朱熹章句』を「母の乳を吸いつつ」教わっている。¹⁴ 『大学』は四書(大学、中庸、論語、孟子)の中でも初学者が

11. 『資料集』17頁。

12. なお蘇峰令孫・徳富敬太郎氏によると、明治維新後の徳富家の族籍は士族であったが、蘇峰はそれを鼻にかけるようなことはしなかった。ただし蘇峰は「徳富家は島原の乱以来の武士の家である」として、その誇りをしばしば家族に語っていたという(平成14年10月4日、電話によるヒアリング)。徳富敬太郎氏より確認と許可を頂いた上で引用した。

13. 『蘇峰自伝』第一、二章、徳富蘇峰『読書法』(講談社学術文庫、昭和56年)。

14. 徳富『読書法』22頁。

まず繙くべき書であり、その要点は己れ一身の修養(修己)を基礎にして天下国家の統治(治人)を行うべきであるというもので、君子としての治者の心構えを説く。¹⁵ 指導者の徳富家では、『大学』は家学の第一たるものであり、¹⁶ 蘇峰自身、父一敬が湯治場で人々に『大学』を講義する風景を記憶している。¹⁷ 明治3年(1870)、7歳の蘇峰は一敬の熊本藩庁出仕にともない、水俣から熊本市東郊の大江村に転居するが、熊本では二年弱の間に高野養賢、元田永孚、竹崎茶堂、兼坂止水の私塾で漢学を学び、四書、五経(易経、詩経、書経、礼記、春秋)をはじめとする漢籍を次々と読んでいった。¹⁸ また蘇峰は儒学以外にも、名誉を重んじ、名を惜しむ武士道的な価値観に接していく。8歳ごろ読み耽った『八犬伝』『弓張月』等の読本には仁義礼智忠信孝悌の儒教的倫理観に加えて、侍の価値観が教訓的にちりばめられている。¹⁹ また幕末から明治にかけて、もっとも多くの読者を獲得した歴史書として知られる頼山陽『日本外史』は一敬の愛読書であり、蘇峰は幼いころに父が読むのをかたわらで聞いていたが、²⁰ 9歳ごろになると自分自身でそれを読むようになる。²¹ 『日本外史』は「恥を重んじ死を軽んずる」のがわが国風であると説き、「死をもって君恩に尽くす」

15. 金谷治訳注『大学・中庸』(岩波文庫、2001年第五刷)の「『大学』解説」。

16. 水俣市立蘇峰記念館に『大学朱熹章句』に相当する『大学章句』(書肆不明、寛政7年再校)が所蔵されている。裏表紙見返しに蘇峰の筆跡で「明治三年於〔カ〕東京求之」とあるから「母の乳を吸いつつ」の時期よりも後のものである。時期からいって、蘇峰自身が東京で購入したとは考えられない。見返しにはその他に「徳富猪一郎」「徳猪」の署名、明治41年に一敬が孫の太多雄、万熊に会談した旨の書き込みがあり、さらに裏表紙に「徳富健」(健次郎)の署名がある。徳富家では『大学』を年少のうちから教えていたことがうかがえる。

17. 『蘇峰自伝』33頁。

18. 『蘇峰自伝』52頁、徳富『読書法』25頁。

19. 蘇峰が『八犬伝』『弓張月』を読んだことは、徳富『読書法』24頁。その中身については、曲亭馬琴作、小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』(一)～(十)(岩波文庫、1990年、2001年第四、五刷)、曲亭馬琴作、和田万吉校訂『椿説弓張月』上、中、下巻(岩波文庫、2001年第十、第八、第八刷)を参照した。

20. 『蘇峰自伝』33頁。

「進んで死するも退いて生きるなかれ」「義を見てせざるは勇なきなり」といった価値観を体現する侍が次々と登場するが、²² 読者はそれを通じて武士としての生き方、日本人としての人生観を学ぶことができた。²³ このように家庭、私塾、読書など蘇峰をとりまく環境は、名望家の郷士としての公共心や義務感、儒学に示された君子の道、書物に表れた武士道の人生観など、士の倫理ともいふべき価値観に満ちていた。

一方、徳富家はもともと尊皇家との関係が深かった。高山彦九郎、頼山陽は蘇峰の父祖と交流し、²⁴ 横井小楠は蘇峰の父や叔父の師として一家の尊敬を集めた。²⁵ 吉田松陰は小楠を訪問した際、蘇峰の親族に送迎されており、橋本左内は小楠との関係から徳富家でもその人物について語られることが少なくなかった。²⁶ このような雰囲気な家庭に育った蘇峰にとって、幕末の志士は生きた存在として感じられ、松蔭や左内に対しては10歳前後より「親しき先輩としての尊敬と愛慕の念」を抱いていたという。²⁷ そうした中で読んだ先の『日本外史』には私利私欲を退け、「尊王の義」と皇室に尽くす者の美しさと正当性が描かれ、中でも楠木正成とその一族は「嗚呼、…真に武臣の名に愧ぢずと謂ふべし」、「その大節は巍然として山河と並び存し、以て世道人心を万古の下に維持するに足る」と絶

21. 水俣市立蘇峰記念館に蘇峰手沢本の『日本外史』が所蔵されている。元治元年10月新刻、明治4年12月再刻の頼復治郎蔵版で全12冊(巻之一～二十二)であるが、筆者の調査時には巻之五～六、巻之七～八の二冊が欠本であった。蘇峰の筆跡で巻之一の表紙に「蘇峯生初時所誦説之書候所尽保存也」、同巻例言の前頁に「是予於兼阪〔ママ〕止水先生家塾蔵□堂所誦説之一也〔中略〕大正四稔八月十九日 於老龍庵」と記されている。蘇峰が『日本外史』を読んだのは、兼坂塾にいた明治4～5年、8～9歳の時であったことがわかる。

22. 頼山陽著、頼成一、頼惟勤訳『日本外史』(中)(岩波文庫、1994年第八刷)245頁、同(上)(1994年第十一刷)76、94、289頁。

23. 尾藤正英「解説」、頼『日本外史』(上)所収、10頁。

24. 『新水俣市史』上巻、408-28頁、藤井賢三『昔 男ありけり—徳富蘇峰・筆戦一代記—』(自費出版、下関プリント印刷、平成3年)7頁。

25. 徳富猪一郎『蘇翁感銘録』(寶雲舎、昭和19年11月)39頁。

26. 徳富『読書法』236-37頁。

27. 同上。

賛された。²⁸ また蘇峰がいつの間にか馴染んでいたという『山陽詩鈔』にも楠氏がくり返し歌われており、²⁹ 11歳ごろに読んだ山陽の『新策正本』は天皇政治を切望し、古代の天皇親政を仰慕する史論であった。³⁰ さらに蘇峰は、幕末の志士が残した詩歌を編んだ『殉難遺草』を読んでおり、それは「皇の御世をむかしにかへさんとおもふこゝろを神もたすけよ」「国のためいはほも砕くゝろもてあとへはひかぬ大和だましひ」といった勤皇愛国の心情を集めた歌集であった。³¹

その勤皇の心はいうまでもなく、日本に迫る西洋列強の排斥を訴えた攘夷の精神と表裏一体をなしていた。津奈木、水俣など芦北地方では嘉永6年(1853)のペリー来航以降、海岸線防御が急務となり、津奈木では異国船に備えた防衛隊が郷士によって組織され、砲術訓練や洋式操練が盛んに行われた。³² 蘇峰の父一敬が海防と西洋の軍事力調査のため長崎、鹿児島に派遣されたことは先に記した通りである。また明治初年の蘇峰は、近傍の青年が徳富家に寄宿して訓練場でイギリス式操練を行うのを見学している。³³ このように西洋列強の脅威が感じられる中で蘇峰が手にした『山陽詩鈔』には長崎に来航したオランダ船の威容を見て国事を憂える詩があり、『殉難遺草』には「方今洋夷猖獗。…皇運之厄極れり矣。天下有志之士。其れ死力を出して以て之を救ふ不る可けんや」「えみし船やがて浪間に打しづめ帆影も見えぬ御世になしてん」「えみしらを斬り尽さんと思ふのみ我がものふのねがひなりけり」といった日本防衛の念と排外感情が強く打ち出さ

28. 『日本外史』(上)283、335頁。

29. 頼襄子成著『山陽詩鈔』(金華堂、天保4年新鈔、明治11年12月翻刻)全4冊(巻之一～六)を参照した。

30. 蘇峰が『新策正本』を読んだことは、早川喜代次『徳富蘇峰』(徳富蘇峰伝記編纂会、昭和54年第二版)7頁、徳富蘇峰『弟 徳富蘆花』(中公文庫、2001年)156頁。『新策正本』の内容については頼山陽原作、高須芳次郎訳注『日本文化史論(原名新策)』(井田書店、昭和16年9月)例言5-7、本文38頁を参照した。

31. 蘇峰が『殉難遺草』を読んだことは、徳富『読書法』236頁。植木直一郎編著『武士道全書』第11巻(時代社、昭和18年4月)225-56頁所収の『殉難遺草』を参照した。

32. 『津奈木町誌』上巻、455頁以下。

33. 徳富『蘇峰自伝』32頁。

れている。³⁴ 同志社英学校進学後の蘇峰は京都三本木の頼山陽旧宅、山紫水明処に何度か足を運び、東山長楽寺の山陽の墓所を参拝したほか、霊山官祭招魂社(現、京都霊山護国神社)にある勤皇の志士の墓を回り、坂本竜馬、中岡慎太郎等の名前を見出して喜びを覚えたが、³⁵ それはこうした読書経験を積んできたためであろう。

以上のように、白紙であった幼い蘇峰の眼前にまず現れたのは、名望家郷士としての家庭環境から来る公共心や君子の道、書物に示された武士道的倫理観であり、さらに尊皇攘夷の精神であった。先学によると大江義塾時代における蘇峰の思想の原型は、幾多の外来思想、学問の移入折衷を加味しながらも、伝統的、心情的日本人の思想の母胎から離れていなかったが、³⁶ ここで指摘される蘇峰の心情的、思想的母胎とは、上記のような環境と読書過程の中から形成されたものであろう。それらはかれの魂の根幹を形成するものであった。しかしながらそうした一方で、蘇峰は西洋化の波を受け始めており、洋学に触れる前からアメリカは必ずしも未知の国ではなかった。一敬の師小楠がアメリカについて様々な認識を抱いたことは研究者によって明らかにされている。³⁷ 小楠が暗殺されたのは蘇峰が6歳のときであるから直接薫陶を受けたわけではないが、小楠の雰囲気満ちた家庭で「空気を呼吸するが如く」その感化を受けたという。³⁸ 蘇峰の家にはアメリカに留学した

34. 『山陽詩鈔』巻之二、34-35頁の「荷蘭船行」、『武士道全書』第11巻所収『殉難遺草』。ちなみに10歳前後の蘇峰はペリー来航から版籍奉還までの幕末史を記した『近世史略』を読んでいる(徳富『読書法』236頁)。そこにはペリー、ハリスやイギリス、ロシアの軍艦が次々と来航して日本に要求を行い、国内に攘夷の説が起こる中で長州藩の欧米商船砲撃から四国連合艦隊の下関砲撃事件、生麦事件から薩英戦争が生じ、やがて戊辰戦争から明治維新に至る過程が述べられている(椒山野史『近世史略』上、中、下、山口氏蔵版、明治5年、熊本大学図書館永青文庫所蔵)。蘇峰はこの書によって西洋列強の衝撃とそこから展開される幕末史の概要を押さえることができたはずである。

35. 早川『徳富蘇峰』17-18頁。

36. 杉井『徳富蘇峰の研究』179頁。

37. 最近の研究では、松浦玲「幕末思想家のアメリカ認識 横井小楠を中心に」『環』Vol. 8(2002年1月)が興味深い。

38. 徳富『蘇翁感銘録』40頁。

小楠の甥、左平太、大平が送って寄越した「ワシントンとナポレオンの肖像」があり、蘇峰が外国人の名前と人物を知ったのはその二人が最初であった。³⁹ 終生、アメリカと心理的に格闘することになる蘇峰の初めて知った外国人がジョージ・ワシントンであったというのは象徴的である。そうした肖像が家庭にあったという点に、建国期のアメリカで「大いに好生の仁風を掲げ」た模範的人物としてワシントンを称えた⁴⁰ 小楠の遺風が感じられよう。

小楠のような開明的人物の存在を身近に感じる一方で、蘇峰は遅くとも9歳のときまでに福沢諭吉訳『世界国尽』を読み、そのすべてを暗記していた。⁴¹ 熊本洋学校時代、蘇峰が浮田和民の前でそれを誦んじてみせ、浮田を驚かせたエピソードは知られている。⁴² 管見の及ぶ限りで、蘇峰がアメリカについて書かれた書物に接したのは、このときが最初である。『世界国尽』の巻四「北亜米利加州」にはワシントンDC、ニューヨーク、カリフォルニアの紹介と簡単な地理の説明があるが、要所は次の独立戦争の記述である。⁴³

頃は安永五年〔1776年〕の秋、十三州の名代人四十八士の連判状、世界へ示す檄文に「英吉利」王の罪を責め自から建てし合衆国、武器兵糧も乏しき民、数万の敵は海を越え新手引替へせめ来る、猛虎飛竜の勢におそれ撓まぬ鉄石のころに誓ふ国のため失ふ生命得る自由、正理屈して生きんより国に報る死を取らん、一

死決して七年の長の月日の攻守、知勇義の名を千歳に流がす血の河、骨の山、七十二戦の艱難も消て忘るゝ大勝利、目出度こゝに「英吉利」と和睦結びし新条約、約束固き政、政体ありて主君なく、天下は天下の天下なり、四年交代の大統領、上院下院の評議役、一國中の便不便、議り定めし法律の威は行はれ猛からず、次第に進む国の富…

ここにはイギリスの圧力に抗して立ち上がり、自由と正義のために命をかけて独立戦争を戦い抜き、新しい国家建設に邁進していくアメリカの姿が描かれている。四十七士ならぬ四十八士、「おそれ撓まぬ鉄石のころに誓ふ国のため」、「正理屈して生きんより国に報る死を取らん」といった筆致で表現される独立戦争期のアメリカ人は、あたかも西洋列強の圧力に奮起する幕末明治維新期の志士のような印象を与える。蘇峰がはじめて出会ったアメリカとは、このように福沢の手によって日本風に噛み砕かれた「アメリカ」であった。⁴⁴ それは外国でありながら、蘇峰が吸い込んできた伝統的な「土」の価値観、殉国の精神と矛盾せず、むしろそれと共鳴し合うものであっただろう。このように蘇峰がまず接したアメリカのイメージは、高貴な精神をもつ倫理的な国家というものであったことを押さえておきたい。次章では引き続き、蘇峰をとりまくアメリカ的世界を追ってみよう。

2 アメリカとの接触—熊本洋学校時代

明治5年(1872)8月、蘇峰は熊本洋学校に入学するが、年齢的に未熟で洋学「不応」とされ、9月に

44. なお和田年譜は、蘇峰が明治4年頃、福沢の『世界国尽』とともに『童蒙教草』も読んだとしている。『童蒙教草』は明治5年発行のため、蘇峰が読んだとすれば、もう少し後の時期であろう。筆者は、蘇峰が『童蒙教草』を読んだことを証明する資料を入手できなかったため、本文中でとり上げるのは控えた。もし蘇峰がそれに目を通していたならば、大統領の職務に誠を尽くしたワシントン、勤勉儉約によって富と名誉を得たベンジャミン・フランクリン、およびフランクリンの『貧しきリチャードの暦』の金言に出会ったはずである。福沢諭吉「童蒙教草」『福沢諭吉全集』第三巻(岩波書店、昭和44年再版)267-68、181-85頁。

退学を余儀なくされる。⁴⁵ そのため横井家にしばしば宿泊して左平太から洋算を習い、その間、左平太が来客に語る「西洋の話」を聞いたり、かれが持ち帰った「西洋の写真」を見せてもらって見聞を広めたという。⁴⁶ ここでいう西洋とは主に左平太が留学し、実見してきたアメリカのことであろう。そうした下地を経て、明治8年(1875)、12歳の蘇峰は熊本洋学校に再度入学して本格的に洋学を学び始め、さらにジェーンズ邸での祈祷会を通じてキリスト教に触れるようになり、有名な花岡山の奉教血盟事件に参加することとなる。よく知られるように、洋学校は一敬実学党の領袖によって建設され、アメリカ人の退役陸軍大尉ジェーンズが一時期行われた漢学を除いてすべての科目を一人で、しかも通訳を通さず英語によって担当した。ジェーンズは学校運営にあたって、自らの出身校ウェスト・ポイント士官学校の規則、カリキュラム、成績順位主義などをモデルとし、イギリスのパブリック・スクール、ラグビー校の校長であったトマス・アーンOLDに影響を受けて全寮制による全人格的教育を実施した。⁴⁷ 蘇峰の在籍期間は明治8年9月から翌9年8月の洋学校閉鎖までの約一年間である。その間、第1学年のかれが受けたと考えられる教育課程は次のようになる。⁴⁸

前半学期		後半学期	
午前課	午後課	午前課	午後課
第一課程書、習字	第二課程書、書綴	英文典中等書	第三課程書(地理初歩兼国学大地理書)

45. 杉井六郎「熊本洋学校—実学党の理想教育機関—」同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究 日本プロテスタンティズムの一元流と展開』(みすず書房、1997年新装版)所収、98、160-61頁。

46. 徳富『蘇峰自伝』55-56頁。

47. 杉井「熊本洋学校」、田中啓介「ウェスト・ポイント陸軍士官学校の熊本洋学校への影響」『英学史研究』第12号(1979年9月)、田中啓介「熊本洋学校とジェーンズ」田中編『熊本英学史』(本邦書籍、昭和60年)所収。

48. これは、杉井「熊本洋学校」150頁に掲げられた広取蟹の学期別課程表のうち第一学年のものであるが、杉井氏によるとそれは洋学校の課程表がそのまま再現されたということであるから(150-51頁)、蘇峰の受けた教育課程もほぼそれと同一であったと考えて差し支えないであろう。

これによると、蘇峰が習ったのは初級英語の読み書きと文法であった。第一、二、三課程書とあるのはリーダーの第一、二、三読本のことであろう。⁴⁹ 具体的にどのような教科書が用いられたかという点、第一回入学者の余田司馬人はウィルソン・リーダー、第二回入学者の下村孝太郎はマクガフィー・リーダーを学んだとしている。⁵⁰ いずれもアメリカで広く用いられたもっとも代表的な児童用教科書であり、⁵¹ 洋学校ではそれを輸入して教本としていた。第五回入学者の蘇峰がどのリーダーを使用したか、手沢本が残されていないため特定は困難であるが、洋学校のテキストは備付けのものが使用されたこと、⁵² しかもマクガフィー、ウィルソン両リーダーのポピュラー性を考えると、蘇峰も上級生と同様にそのいずれかを用了可能性が考えられる。そこでとりあえず、蘇峰に学年の近い第二回入学者が学び、しかも熊本県立大学図書館に洋学校関係洋書として現存するマクガフィー・リーダーを中心にその中身を見ておきたい。⁵³

同リーダーの場合、第一に道徳色が濃厚であった。第一読本には、例えば次のような話がある。フランク・ブラウンは学校に向かう途中で悪童に誘われ、池に遊びに行く。ところが水中に落ち、溺死してしまう。かれの遺体が家に運ばれたとき、

49. 杉井「熊本洋学校」150頁もそれと同様の解釈を示唆している。

50. 同上、154頁の註6に再引された余田の談話、および下村孝太郎「ヂエンス先生を追懐す」『日本に於ける大尉ジェーンズ氏』(警醒社書店、明治27年4月)所収、89頁。後書は熊本県立図書館に原本のコピーが所蔵されており、それを閲覧した。

51. Ruth Miller Elson, *Guardians of Tradition: American Schoolbooks of the Nineteenth Century* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1964).

52. 杉井「熊本洋学校」136頁。

53. 杉井「熊本洋学校」136-49頁は、熊本女子大学(現、熊本県立大学)附属図書館に洋学校関係洋書として保管されるマクガフィー・リーダーをはじめ各教科書を分類し、そのアウトラインを紹介している。筆者はこれを手がかりとして調査を進めることができた。なおマクガフィー・リーダーは1836-37年、1857年、1879年に改訂されている。Elliott J. Gorn, ed., *The McGuffey Readers: Selections from the 1879 Edition* (Boston: Bedford/St. Martin's, 1998), 3. 洋学校で使われたのは1857年改訂版である。

両親はどう思うだろうか。「学校に行くときは道草をするな。悪い子供たちと遊ぶな。かれらはあなたを危険に引き込むだろう。」⁵⁴ 第二読本には次のような話がある。ジョージは良い子であったが、腹を立てやすいという欠点があった。父親はかれに一日怒らないでいたら1ドルあげようと提案する。それを知った友人は故意にジョージを挑発するが、ジョージは我慢し、その晩、1ドルを手に入れた。しかし父は問いかける。「お前は1ドルのために正しいことができた。だが、すべてを与えて下さるゴッドへの愛から、同じことができないだろうか？」ジョージは二度と怒らないと約束し、文末に「ゴッドを愛する者は、正しい行いが簡単なことを知るのです」との教訓が付される。⁵⁵

その他にもマクガフィー・リーダーは、自分だけケーキを食べるのでなく、学友や貧しい盲目の老人にも分け与えた少年、母親の手伝いをしたいと縫い物に励む少女、弟の負担を軽くしながら荷物を一緒に運ぶ兄などを描き、利己を戒め、親孝行や兄弟愛、隣人愛の貴さを教えた。⁵⁶ 第二回入学者の海老名弾正はその第一読本を読んで「アメリカ人にも道徳心があることが判った」と回想するが、⁵⁷ 家庭で厳格な躾を受け、漢学を通じていわば修身を学んだかれら士族の子弟にとって、こうしたアメリカのリーダーは共感できる個所が少なかつたに違いない。ちなみに年少時から蘇峰がくり返し学んだ『論語』は、児童向けリーダーよりも高度であることはいままでもないが、それは仁(誠実)、義(正義)、善行、危険な場合に命を投げ出す覚悟、己れを正しく保って謹慎を失わぬこ

となどを説き、見境なしの利益追求を戒め、父母への孝、兄弟仲、友人への誠実を促すなど、⁵⁸ リーダーと多くの共通点があった。

マクガフィー・リーダーは、第二にキリスト教色が強かった。第一読本には、少女がベッドの前にひざまずいて祈りを捧げる挿絵とともに、「おお! わが主よ、私が罪を犯さないようにして下さい。…主は私たちのなすことすべてを御覧になれます。主の御目になつた行いをさせて下さい」といった文章が登場する。⁵⁹ その他にも「あなたは誰が太陽を創ったか知っていますか? ゴッドが創造されたのです。ゴッドは月やすべての星もお創りになりました。…私たちの持てるものすべてを与えて下さり、私たちを生かし続けて下さいます。私たちはゴッドを愛し、その聖なるご意志にしたがうべきなのです」といった文が現れる。⁶⁰ こうした記述は第二読本になるとさらに増え、「あなたはゴッドに自分の罪を許して頂けるよう、罪から遠ざけて頂けるよう祈るべきです。すべての恵みを与えて下さったゴッドに感謝すべきです。若いうちにゴッドを信頼することを学ぶべきです」といった文章や詩が続出し、⁶¹ それは第三読本でも同様であった。⁶² このようにマクガフィー・リーダーを読む者は頻繁にGodの語に行き当たり、キリスト教の信仰に触れざるを得なくなっている。それなくしてこの読本を読み進めることはできないといってよい。ジェーンズには聖書を教える前に、リーダーを通して生徒にキリスト教への関心を自発的に喚起できるという目論見があったのではないか。

マクガフィー・リーダーは勤勉、克己、忍耐、勇氣、善悪の区別、利他心、隣人愛など様々な道徳で満ちており、それにキリスト教の教えを加味した修身書といっても過言ではない。それではもう

58. 宮崎市定『論語の新研究』(岩波書店、1984年第11刷)の第三部「訳解篇」。

59. *McGuffey's New First Eclectic Reader*, 26.

60. *Ibid.*, 57.

61. *McGuffey's New Second Eclectic Reader*, 50.

62. WM. H. McGuffey, *McGuffey's New Third Eclectic Reader: For Young Learners* (Cincinnati: Wilson, Hinkle & Co., [1865]). 熊本県立大学附属図書館所蔵。

54. WM. H. [William Holmes] McGuffey, *McGuffey's New First Eclectic Reader: For Young Learners* (Cincinnati: Wilson, Hinkle & Co., [1863]), 67-68. 出版年の記載はなく、カッコ内に記した年は法令による著作権登録年である。以下同様。熊本県立大学附属図書館所蔵。

55. WM. H. McGuffey, *McGuffey's New Second Eclectic Reader: For Young Learners* (Cincinnati: Wilson, Hinkle & Co., [1865]), 16-17. 熊本県立大学附属図書館所蔵。

56. *McGuffey's New First Eclectic Reader*, 58; *McGuffey's New Second Eclectic Reader*, 22-23, 28-29.

57. 杉井「熊本洋学校」150頁。

一つのウィルソン・リーダーはどうであったかという、中身の体裁や形式から扱っている徳目に至るまでマクガフィー・リーダーに酷似しており、両者の性質はほとんど同一であるといってよい。⁶³ しかしながら、ここでとくに指摘しておきたいのは、こうした傾向が両リーダーだけに限られるものではなかったという点である。ピューリタンの伝統が残っていた19世紀アメリカの教科書は出版社、出版地を問わず、リーダーはもとより、スペリングブックや文法、作文書に至るまで、いずれも道徳とキリスト教のトーンが濃厚な文章で満ちている。⁶⁴ 生徒はそのどれを手にしても、キリスト教的道徳に触れざるを得なかったといえる。先述の通り、蘇峰が手にしたリーダーを正確に特定することは不可能である。しかしながらアメリカから教科書を輸入し、それを用いた熊本洋学校において蘇峰の眼前に現れたアメリカとはまず、道徳的なキリスト教国というものであっただろう。⁶⁵

次にリーダーは特定できないものの、洋学校時代の蘇峰が用いたことが判明している教本が一

63. ウィルソン・リーダーもマクガフィーと同様にいくつかの改訂版があるが、洋学校で使われた可能性があるのは、Marcius Willson, *The First[-Third] Reader of the School and Family Series* (New York: Harper & Brothers, [1860])とMarcius Willson, *The First[-Third] Reader of the United States Series* (New York: Harper & Brothers, [1872])である。カッコ内は著作権登録年。このうち1860年版については高梨健吉、出来成訓『英語教科書名著選集 第2巻 Willson's Readers』(大空社、1992年)に収録された第一、第二読本の復刻、および第三読本の原本を、1872年版についてはそれぞれ原本を参照した。各版とも内容はよく似ており、扱った徳目もほぼ同一である。なお、ウィルソン・リーダーは熊本県立大学附属図書館の洋学校関係洋書の中に収蔵されていない。

64. Elson, *Guardians of Tradition*.

65. 熊本県立大学附属図書館に洋学校関係洋書として保存されたリーダーにはその他に、Epes Sargent, *The Standard First Reader: For Beginners; Containing the Alphabet, and Primary Lessons in Pronouncing, Spelling, and Reading* (Boston: John L. Shorey, 1869); *Second [-Third] Book of Lessons: For the Use of Schools* (Dublin: Alexander Thom, Printer & Publisher, 1866, 1867) がある。いずれもマクガフィー、ウィルソンと同じ特徴を示し、とくにダブリンとロンドンで発売された後書は旧約聖書にちなんだ文章が多い。ただしこれらは皆、使い込まれた形跡がなく、蘇峰ないし洋学校生徒が使用した確率は低いと考えられる。

冊存在する。『マクガフィーの新・少年向け演説教本』である。⁶⁶ 同書の存在は、杉井六郎氏の紹介によって知られるようになった。表紙見返しに拙い筆跡で「Tokutomi Iyichiro」(徳富猪一郎)の署名が入っており、杉井氏によると「若き日の蘇峰が本書を携帯しながら、初級英語に励んだものであろう」という。⁶⁷ 同書には多数の模範文が収録され、勤勉、克己、自己信頼の精神、独立戦争や自由自主の国アメリカへの賛美と愛国心、ゴッドの恵みや栄光を謳ったもの、あるいはピューリタらしく飲酒の罪を訴えたものなどアメリカの精神性を感じさせる例文が多くを占めている。行間に蘇峰の筆跡を思わせる文字が書き込まれている一節として、例えば以下のようなものがある。

ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、バルティモア、シンシナティを御覧なさい。この新国家〔アメリカ〕にある多くの小さな村々を見て御覧なさい。…病院、救護院、救貧院、避難所、静かな保護施設、居心地の良い避難施設が、人々のあらゆる苦しみを受け入れるために開かれているのが目に入りませんか? …古代都市と私たちの若々しい町、東洋の人間と西洋の人間、古代と現代を大きく分けるものは何でしょう? それは新世界のキリスト教なのです…。⁶⁸

あきらめるな!もし逆境がのしかかっても、ゴッド〔Providence〕は賢明にカップをかき混ぜてきた。あなたの苦しみすべてに対して最良の忠告は「あきらめるな!」の頑強な一言だ。⁶⁹

66. *McGuffey's New Juvenile Speaker: Containing More than Two Hundred Exercises, Original and Selected, for Reading and Speaking* (Cincinnati: Wilson, Hinkle & Co., [1860]). カッコ内は著作権登録年。熊本県立大学附属図書館所蔵。

67. 杉井「熊本洋学校」139頁。

68. “The Contrast,” *McGuffey's New Juvenile Speaker*, 56.

69. “Never Give Up,” *McGuffey's New Juvenile Speaker*, 87. これらの行間には英単語の意味が書き記されており、それは後の蘇峰の筆跡と似ている。しかしながら、同書には「白川県図書印」「熊本洋学文庫」の他に「熊本県尋常師範学校」の蔵書印が押されており、蘇峰以外の生徒が書き入れたこともあり得るため、蘇峰の書き込みと断定することはできない。

こうした英文は、第一から第三読本を学ぶ一年生にとって高度である。したがって蘇峰がこの書を深く読み込めたかどうかは判断を下し難いが、この書を手にした蘇峰は、その内容からして倫理性の強いアメリカを感じ取らざるを得なかっただろう。

アメリカ製の教科書に描かれたキリスト教的、道徳的、精神的なアメリカは、当時の同国の一面を示している。しかしながら半面、それはアメリカ人がこうあって欲しいと望む理想のイメージでもあった。そうした理想像は、ピューリタニズムとキリスト教の伝統にのみ由来するのではない。アイデンティティが揺らぐアメリカ人は“Americanness”を身につけようとし、また身につけなければならず、あるべきアメリカ人の姿を教科書の中に描き出そうとした。⁷⁰ 蘇峰の前に示されたアメリカとは、アメリカ人自身が求める心象風景でもあった。もっとも蘇峰の側にも、精神国アメリカの理想像に抵抗を感じないだけの伝統的素地があったことは前章で述べた通りである。

以上、熊本洋学校時代までの蘇峰の前に現れたアメリカ像を追ってきた。しかしながら、この間に蘇峰が書き残した文章は管見の及ぶ限り、ほとんど見当たらず、したがってアメリカに関するかれ自身の生の声も聞くことはできない。蘇峰が自分の対米認識を示しはじめるのは同志社英学校に入ってからのことである。

3 アメリカへの敬意—同志社英学校時代

(1) 高貴な精神をもつアメリカのイメージ

明治9年(1876)10月、13歳の蘇峰は、開学して一年弱の同志社英学校に入学する。周知のように同志社は、新島襄が教育を受けたニューイングランドのカレッジをモデルとし、授業の多くは英語で行われ、教科書もアメリカの学校で使用された書籍を用いており、⁷¹ 蘇峰は熊本洋学校に引き続いてアメリカ風の教育環境で多感な時期を過ごすことになる。同志社時代に蘇峰が記した文章は

70. Elson, *Guardians of Tradition*, 337-42.

71. 北垣宗治「同志社英学校の開校」上野直蔵編『同志社百年史』通史編一(同志社、1979年)所収、84-85頁など。

『資料集』に収められており、そこからかれの対米観を断片的に知ることができる。まず明治12年(1879)12月、蘇峰は次のように書いている。⁷²

夫レ聖教ノ行ハルハ重ニ欧米各国ニアリ。故ニ全国ノ風儀ヨリ諸子百家ノ書ニ至ル迄、幾分カ聖教ノ精神ヲ帯ヒザルハナシ。而シテ学者カ彼地ニ在留スルモ、旅行スルモ、又諸子百家ノ書ヲ講スルモ、必ラス耶穌教ノ必要ナルヲ覺リ得バク、ヨシ然ラサルモ、人心ニ感触スル処口思ヒ得ヘキニ…

欧米では国内の風儀から諸学者の書物に至るまで、キリスト教の精神を帯びていないものはない。そのため、かの地を訪ねた学者はキリスト教の重要性、必要性を感じざるを得ないのだという。ここでは欧米という言葉が使われているが、これをアメリカとしても差し支えないであろう。蘇峰は、アメリカを含む欧米でキリスト教精神が国民から学者まで相当の規模で普及していると認識していることがわかる。これは、熊本洋学校時代に蘇峰を取り巻いていたキリスト教国アメリカのイメージと重なり合う。また、かの地でキリスト教の精神を感じた学者として、蘇峰の念頭には新島があったであろう。蘇峰は新島を一つの媒介としつつ、欧米にキリスト教精神が流れていることを学んだのではないかと推察される。

ほぼ同時期、蘇峰はアメリカン・ボードから同志社に毎年8,000ドルの資金を寄付する通知が届いた直後に、以下のような文章を記している。これは同志社時代の蘇峰が示したアメリカ観の中で、もっともまとまった形をなすものである。⁷³

…我国今日ノ文明ハ誰レカ与ヘタルモノソ、我国今日ノ聖徒ハ誰レカ出来シタルモノソ、我

72. 徳富猪一郎「聖教速了論」『資料集』所収、92頁。明治12年12月5日発行『七一雑報』4巻49号に掲載された文章である。

73. この文章はまず、杉井『徳富蘇峰の研究』97-98頁で紹介され、次いで『資料集』100-101頁に収められた。明治12年12月7日に記されたものである。

国今日聖教ハ誰レカ初メテ伝ヘタルモノソ、我輩ハ之レヲ思フコトニ未タ嘗テ感泣セズンハアラサルナリ。

嗚呼是レ米国人民カ我輩ニ分与シタルモノナリ、我輩之レヲ忘却シテ可ナランヤ、寧口之レヲ報ヲ思ハサル可ラス。我カ同志社ヲ与ヘ、我カ新嶋先生ヲ与ヘ、我カ教師ヲ与ヘ、我カ勉勵ノ場所ヲ与ヘタルハ皆米国人民ノ給ナリ、嗚呼米国人民カ我カ国民ノ恩人ナリ、我信徒ノ兄弟ナリ、彼ノ宣教師輩ハ現ニ其ノ著シキ一分ヲシメタルモノナリ、之レヲ思ハサル可ラス、何ヲ以テカ之レニ報セン。

日本に文明とキリスト教を伝えてくれたのは米国民である、わが同志社、新島先生、教師を与えてくれたのは米国民である、かれらはわが国民の恩人、わがキリスト教信徒の兄弟あり、これを思うと感泣せざるを得ないというのである。ここで蘇峰が心中に抱くアメリカは、単にキリスト教国というだけでなく、日本にキリスト教と文明を授けてくれた恩人の国とイメージされていることがわかる。

財政難に苦しむ中、寄金を受けた新島は、先学がいうようにアメリカン・ボードとそれを支えるアメリカ人信徒に強い感動を覚え、それを生徒に伝えたことであろう。⁷⁴ 蘇峰の感激の彼方には、同志社を支えてくれたアメリカ人に感謝の念を捧げる新島の姿が透けて見える。新島を慕う蘇峰は、新島と心情的に一体化し(もしくは一体化しようとし)、新島を通してアメリカを見ようとしたと考えられる。それでは新島を介して手に入れたアメリカのイメージは、同志社退学後はどうなったであろうか。日露戦争時の親米時代から大正、昭和戦前、戦中の反米時代、さらに戦後に至るまで、そこに大きなぶれはない。この間、蘇峰は新島とアメリカについて次のように述べている。新島先生は「新英州の濃厚たる宗教的空氣」があったアメリカに渡り、「自由の空氣」に刺激されて初心を一層強めた(明治38年)、米国に苦学した新島は「米国新英州の醇粹、無垢なる清教徒的の血液」を注入された(大正5

74. 杉井『徳富蘇峰の研究』98頁。

年)、先生は清教徒の流風余韻がなお漂っている新英州、エイブラハム・リンカンの流した血がなお温かい「精神米国」、今日と異なる「善き米国」へ留学し、「自由、自治、独立、清潔などの清教徒信条」に薫化された(昭和11年)、先生は「正義人道を以て中心とするところのアメリカ魂」が澁刺と輝くニューイングランド時代のアメリカで成長したヒューマニズムの人であった(昭和15年)、新島はニューイングランドのピューリタン伝来の「不覇独立、自由自主の精神と、神を畏れ人を愛し、己れを捨て、公に奉ずる精神」の中で教養せられた(昭和29年)という。⁷⁵ これを見ると中年から晩年まで、蘇峰は新島留学時代のニューイングランドをピューリタニックなキリスト教と自治の氣風が流れる清浄な土地ととらえている。新島を通して見た「精神米国」への敬慕の念は、蘇峰の心から消え去ることがなかったのである。

その他にも気高い精神をもったアメリカのイメージは、蘇峰の周辺をとりまいていた。同志社時代、蘇峰は授業以上に福地源一郎の『東京日日新聞』社説に熱中し、福地の文章を「腹の底まで沁みるほど玩味」した、それによって「米国独立時代の歴史」を知ることができたという。⁷⁶ 蘇峰在学中の明治9年秋から13年の『東京日日新聞』、さらに蘇峰が京都の博物館で読み漁ったバックナンバー(明治8~9年)を調べてみると、⁷⁷ 明治10年の社説の中にアメリカ独立史のまとまった記述を見出すことができる。蘇峰が学んだ社説とはこれを指すと考えられる。⁷⁸ その中で福地は次のようにいう。「吾曹ハ嘗テ米利堅開国史ヲ讀ミ国人兵ニ勇ムノ条ニ至リ精氣淋漓今猶眼ニ在リ」、独立戦争の端緒となったレキシントンの戦いはアメリカ人を憤激さ

75. 徳富猪一郎「新島襄先生」(同志社、昭和30年)170-75、182、56、206頁。昭和11年のみ、徳富蘇峰『日本精神と新島精神』(関谷書店、昭和11年2月)14、17頁。

76. 徳富「読書法」30-31頁。

77. 蘇峰が同志社入学前の明治8年ごろのバックナンバーまで読んでいたことは『蘇峰自伝』92-93頁。

78. 『東京日日新聞』明治10年2月28日社説。この頃、西南戦争と関連してアメリカ独立戦争への言及がなされるようになったが、この社説はそのもっともまとまった記述となっている。

せ、農民は耕野を棄て、工人は作場を出て、老幼を問わず争って兵に就き、婦人は夫のために剣を装い、母は子のために銃を負わしめた。ある母は、包丁を鎔かして作った小銃を長男に与え、年下の子には古びた剣しかなかったのを、それを取って進めと促した。またある農夫は10歳の息子が軍にしたがってケンブリッジに向かおうとするとき、神が汝を守ってくれるだろう、戦場では奮戦決闘、人に譲らぬようにせよ、さもなければ自分は再びお前に会わないと述べた。「此ノ如キノ精神全国至ル所 然ラザルナシ是レ二万有余ノ勇士ガ一朝ニシテ ボストン周囲ニ集合セシ所以ナリ」と福地はいう。

このように福地は自由と正義を願うアメリカ人が、郷土のために勇気と自己犠牲の精神を發揮したと見る。これは先に見た福沢『世界国尽』の記述とよく似ており、ここにおいて蘇峰の眼前に、キリスト教精神のアメリカに加えて、自由と独立のために生命をかける志士的なアメリカのイメージが再び表れるのである。このイメージを蘇峰が抵抗なく受け入れたであろうことは、やがて大江義塾時代の蘇峰が福地とよく似たアメリカ像を示していることから明らかである。蘇峰は義塾の講義案「米国革命史」の中で、アメリカ人が「老人モ小兒モ皆競テ国家ノ敵ヲ打チ払ハントセリ」とし、「義ニ勇ム」ボストン市民、「猛勇剛氣ノ勇士」、息子の勇敢な戦死を聞いて満足を表明した「義氣ニ富メル」老人、兵士のために衣服を作った「国事ニ熱心」な米国婦人たちを描いた。⁷⁹ その筆致は福地のそれと重なり合う。

しかしながら、そうした記述は福地に限らなかった。同志社で蘇峰が確実に使用したことが判明しているテキストのうちアメリカについて記述があるものは、パーレーの万国史、ウィルソンの万国史、アーノルド・H・ギョーの『コモンズ・スクール・ジオグラフィー』の三冊に絞られる。⁸⁰ ただしパーレー

79. 『資料集』398、400-401、412-13、424頁。明治19年1月から蘇峰が行った講義案である。

80. 三書を蘇峰が読んだことは、前掲、徳富『蘇峰自伝』81-82頁。その中であげられるパーレーの万国史は、*Peter Parley's Universal History: On the Basis of Geography* (New York: Iverson, Blakeman, Taylor, & Co., 1873) であろう。

の万国史については身を入れて読んだわけではないため、⁸¹ ここでは除外し、ギョーの『コモンズ・スクール・ジオグラフィー』は後章でとり上げることとして、ここではウィルソンの万国史のみ紹介しておく。マーシャス・ウィルソン『万国史』はアメリカについて次のように記している。⁸² 「初期の入植者、とくにニューイングランドへの移住民は大西洋の対岸にあった家を離れ、アメリカの荒野に避難所を求めたのだった。そこでは他から煩わされることなく宗教上の信仰と礼拝を実現できた。そしてかれらは、自分たちが選んだ土地に独立の精神と自由主義をもたらしたのである。それらはアメリカの自由の礎となった。」「こうした初期植民地の歴史は、すべての人にとって教訓に満ちている。一すなわち粘り強い忍耐、何物にも屈しない堅忍不拔の心、気高い英雄的行為、個人の敬虔さ、人々の高潔さである。しかしながらそれ以降の時代において、自由政体の原理が発展成長し、わが国〔アメリカ〕に幸福と栄誉がもたらされ、さらに世界中へ自由の大義を推し進める結果となったことにアメリカ人は特別な重要性を見出すことだろう。」また独立戦争については、イギリスがアメリカ人を服従させようとあらゆる計略を用いたため、1775年、レキシントンの小競り合いから独立戦争が始まった。これは弱者対強者、少数対多数の戦いであったが、自由の大義のために戦争は成功裡に終わった。アメリカは不滅のワシントンの忠告に導かれ、アメリカ人を服従させようとする世界最強国のあらゆる試みを堂々と抑え、イギリスが派遣した最精鋭の部隊をヨークタウンで降伏させた。1781年、イギリス南部方面軍の敗北と投降の後、戦争は事実上、終結したと考えられ、翌年には英米間に予備平和条項が調印された、と叙述する。このように蘇峰が用いた教科書も、宗教の自由を求めて辛苦に耐えたニューイングランドの高潔な

81. 『蘇峰自伝』81-82頁。蘇峰はパーレーの万国史が「あまりに子供らしく、莫迦らしく思へた」ため、別の歴史書と交換することを提案し、自らウィルソンの万国史を四、五冊を買い求め、課程の読本にしたという。

82. Marcuis Willson, *Outlines of History* (New York: Iverson, Blakeman, Taylor, & Co., 1872), 396, 436-44.

ピューリタン、自由のために正義を貫いて強者イギリス本国と戦った気高いアメリカの姿を強調していた。

同志社時代の蘇峰が残した断片的な文章の中に、福地の社説やウィルソンの万国史と同様のアメリカ認識を見出すことはできない。しかしながら、蘇峰はこの志士的なアメリカ像を自然に受け入れることはあっても、排除することはなかったであろう。なぜなら、それは同志社入学前からかれが抱く伝統的価値観と共鳴し合うものであったし、大江義塾時代の蘇峰は、前述のように、これとほぼ同様のアメリカ像を描いており、さらにその後も類似の認識をくり返し示しているからである。同志社時代の蘇峰をとりまく環境は新聞社説、教科書のいずれにしてもアメリカの精神性を感じさせるものばかりであり、逆にそれに反するものを探し出すことは容易ではない。同志社中退以後の蘇峰がキリスト教と自由の国アメリカの見方を打ち出していくことになるのは、こうした環境とプロセスを経ているからであろう。次節では、アメリカを宗教的、精神的な国とみなすムードが強い中で、蘇峰がアメリカ人の宗教と道徳をアレンジして自己の体内にとり入れようと試みた点を見ていきたい。

(2) フランクリンとピーチャーによる刺激

同志社入学直後、蘇峰は新島から洗礼を受け、クリスチャンネームを掃留 (Saul) としたことは知られている。⁸³ それから一年七ヶ月余りを経て、明治11年(1878)、15歳の蘇峰は自己の祈祷の記録を「朝夕工課」と題した綴りに記録した。その序文には次のようにある。⁸⁴

吾輩嘗テ仏氏ノ十二徳ヲ読ミ、其ノ心志ノ鴻大ナル、其ノ精神ノ鋭果ナルニ感セスンハアラサルナリ、…

83. 杉井『徳富蘇峰の研究』82頁。

84. これはまず杉井『徳富蘇峰の研究』82-83頁で紹介され、次いで『資料集』15頁に収録された。蘇峰は綴りの表紙に「朝夕工課」と日本語で標記するだけでなく、「Morning & Evening Exersice [sic]」と英語でもタイトルを書き入れている。

自分は以前、仏氏の十二徳を読み、その志の大きいこと、その精神の優れて果敢なことに感動せざるを得なかったという。蘇峰はさらに文章を続けて、人間は古今を問わず、その過ちを覚り、その罪を取り除くことによって善人となる。聖書に「実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように〔父＝ゴッドが〕手入れをなさる」〔「ヨハネによる福音書」15:2〕とあるが、まったくその通りである。わが君〔ゴッド〕の助けがあり、仏氏の心情をもつ自分は謹んで聖書中の言葉を集め、かの十二徳に倣うこととした。このように蘇峰は「仏氏ノ十二徳」からインパクトを受けたことを明かし、聖書から文章を抜粋して同様のものを作り、自己の戒めにしたいと決意を記した。⁸⁵ ここで登場する「仏氏」は「仏蘭克林」氏、すなわちフランクリン氏であり、「仏氏ノ十二徳」とは『フランクリン自伝』に登場するフランクリンの十二徳(後述のように本来は十三徳)と解釈するのが自然であると考えられる。⁸⁶ 蘇峰は加えて以下のような説明をくり返す。⁸⁷

吾輩嘗テピーチヨル氏ノ朝夕工課ヲ読ミ、之ヲ慕フコト久矣。而シテ敢テセサルハ蓋シ中絶センコトヲ慮ハナリ。今ヤ仏氏之十二徳ニ倣イ、聖經十徳ヲ作為セリ、今日ニ当リテ之レヲ敢テセサレハ、何レノ時ヲカ期セン。

自分がかつてピーチャー氏の朝夕工課を読んで、それを長い間慕っていた。それなのにあえて

85. 原文では、聖書を引用する際に蘇峰は漢文を用いているが、本稿ではそれを『聖書 新共同訳』(日本聖書協会、1987年)の現代訳に改めた。以下、同様。

86. 杉井氏は仏氏をヘンリー・W・ピーチャーと解釈しているが、仏氏をピーチャーないしピーチヨルと音読するのは無理があろう。諸橋轍次『大漢和辞典』巻一(大修館書店、平成11年修訂第二版第五刷)718頁に「仏蘭克林」でベンジャミン・フランクリンを指すとあり、また明治17年に『仏蘭克林 金言玉行録』といった題名の本が発行された(亀井俊介「フランクリンの人と作品」、池田孝一訳、亀井解説『アメリカ古典文庫1 ベンジャミン・フランクリン』研究社出版、1975年所収、25頁)時代背景を考えると、仏氏はフランクリン氏とするのが適当であると考えられる。

87. 杉井『徳富蘇峰の研究』83頁、『資料集』15頁。

実行しないのは途中でやめてしまうことを心配したからである。しかし今、フランクリン氏の十二徳にならい、「聖經十徳」を作った。ここで実行しなければ、いつそれができるだろうかというのである。「ビーチャール氏」は先学が解釈する通り、19世紀アメリカの牧師であり有名な説教家であったヘンリー・W・ビーチャーである。⁸⁸ それではビーチャー氏の「朝夕工課」とは何のことであろうか。ビーチャーの著作を調べてみると、明治4年(1871)、ビーチャーの文章をライマン・アボットが編集した『朝夕工課—ヘンリー・W・ビーチャー師の公刊ないし未刊の文章から—』という書物が出版されていることがわかる。⁸⁹ 編者のアボットによると、同書に収録されたビーチャーの文章をセレクトしたのはビーチャー自身でなくアボットではあるが、ビーチャーの承認を受けた上で出版したのだという。⁹⁰ 書名、実際の執筆者、発行時期のいずれから見ても、蘇峰がいうビーチャー氏の「朝夕工課」とはこの書以外に考えられない。そこで順序を整理してみると、蘇峰はまずこのビーチャーの『朝夕工課』を読んでそれに慕わしい気持を抱き、次にフランクリンの十二徳を読んで感動し、自分自身も「聖經十徳」を作って実践することを思いついた。その上で、ビーチャーにあやかり自ら「朝夕工課」と題した綴りを作り、そこに自己の祈祷の記録を記していったのである。

蘇峰の「聖經十徳」とはいかなるものか。またフランクリンとビーチャーからどのような影響を受けているのか。この点を明らかにする前に、まずフランクリンの十二徳(十三徳)を見ておきたい。よく知られるように、それは『フランクリン自伝』第六章「十三徳樹立」の中で説明されている。1731年、

88. 杉井『徳富蘇峰の研究』84頁、『資料集』所収の杉井解説、831頁。

89. *Morning and Evening Exercises: Selected from the Published and Unpublished Writings of the Rev. Henry Ward Beecher*, ed. Lyman Abbott (New York: Harper & Brothers, 1871). 蘇峰が「朝夕工課」綴りの表紙に“Morning & Evening Exersice [sic]”と記したのは、この書のタイトルにちなんだのであろう。

90. Lyman Abbott, “Preface,” *Morning and Evening Exercises*.

25歳のフランクリンは「道徳的完成に到達しようという不敵な、しかも困難な計画」を思い立ち、自己の過ちを克服するためには良い習慣を身につけるべきだと考え、次の十三の戒律を作り、自らに課した。⁹¹

- | | |
|----|---|
| 第一 | 節制
飽くほど食うなかれ。酔うまで飲むなかれ。 |
| 第二 | 沈黙
自他に益なきことを語るなかれ。駄弁を弄するなかれ。 |
| 第三 | 規律
物はすべて所を定めて置くべし。仕事はすべて時を定めてなすべし。 |
| 第四 | 決断
なすべきことをなさんと決心すべし。決心したることは必ず実行すべし。 |
| 第五 | 節約
自他に益なきことに金銭を費やすなかれ。すなわち、浪費するなかれ。 |
| 第六 | 勤勉
時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし。無用の行いはすべて絶つべし。 |
| 第七 | 誠実
詐りを用いて人を害するなかれ。心事は無邪気に公正に保つべし。口に出だすこともまた然るべし。 |
| 第八 | 正義
他人の利益を傷つけ、あるいは与うべきを与えずして人に損害を及ぼすべからず。 |
| 第九 | 中庸
極端を避くべし。たとえ不法を受け、憤りに値すと思ふとも、激怒を慎むべし。 |
| 第十 | 清潔
身体、衣服、住居に不潔を黙認すべからず。 |

91. 松本慎一、西川正身訳『フランクリン自伝』(岩波文庫、昭和47年第18刷)135-36頁。

- | | |
|-----|--|
| 第十一 | 平静
小事、日常茶飯事、または避けがたき出来事に平静を失うなかれ。 |
| 第十二 | 純潔
性交はもっぱら健康ないし子孫のためのみ行い、これに耽りて頭脳を鈍らせ、身体を弱め、または自他の平安ないし信用を傷つけるがごときことあるべからず。 |
| 第十三 | 謙讓
イエスおよびソクラテスに見習うべし。 |

明治の日本では十三徳のうち十二番目の「純潔」が露骨な内容のため、それを除いた十二徳の形で紹介されたことが知られている。⁹² そのフランクリンの十二徳をモデルにしたと考えられる蘇峰の「聖經十徳」は以下のとおりである。⁹³

- | | |
|------------|--|
| 第一、神ニ対スル職務 | 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛しなさい。(マルコ12:30) |
| 第二、人ニ対スル職分 | 互いに愛し合いなさい。(ヨハネ13:34) |
| 第三、希望責任 | 私の食物とは私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成しとげることである。(ヨハネ4:34)
私たちは目に見えないものを望んでいるなら忍耐して待ち望むのです。(ローマの信徒への手紙8:25) |
| 第四、溫柔 | 柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。(マタイ5:5) |

92. 亀井「フランクリンの人と作品」の他に、今井輝子「日本におけるフランクリンの受容—明治時代」『津田塾大学紀要』No.14-[2]、1982年3月、木村毅『日米文学交流史の研究』(恒文社、1982年)の第十章「フランクリンと日本宮廷」、平川祐弘『進歩がまだ希望であった頃—フランクリンと福沢諭吉—』(新潮社、1984年)などを参照のこと。

93. 杉井『徳富蘇峰の研究』83-84頁、『資料集』15-16頁。原文は漢文であるが、日本聖書協会の現代訳に改めた。なお、蘇峰は自分が選んだ聖句が聖書中のどの章節に由来するのか記載していない。各章句の出典は、杉井氏が明治期の漢訳聖書を検証し、それと照らし合わせることによってはじめて割り出したものである。

- | | |
|-------|---|
| 第五、謙遜 | 主であり師である私があなた方の足を洗ったのだから、あなた方も互いに足を洗い合わなければいけない。(ヨハネ13:14)
互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。(ローマの信徒への手紙12:16) |
| 第六、勤勞 | 怠らず励み、靈に燃え、主に仕えなさい。(ローマの信徒への手紙12:11) |
| 第七、沈黙 | 私の唇から賛美が溢れるでしょう。あなたが掟を教えて下さいますから。私の舌はあなたの仰せを歌うでしょう。あなたの戒めはことごとく正しいのですから。(詩篇〔旧約聖書〕119:171-2) |
| 第八、親切 | 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。(ローマの信徒への手紙121:5) |
| 第九、儉約 | 人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。(ヨハネ6:12) |
| 第十、清潔 | 心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る。(マタイ5:8) |

蘇峰の「聖經十徳」は新約聖書を中心に、一部旧約聖書から選んだ言葉によって構成されていた。蘇峰とフランクリンの徳目を比較すると、次の点に類似性が見られる。

フランクリン	蘇峰
第二 沈黙	第七、沈黙
第五 節約	第九、儉約
第六 勤勉	第六、勤勞
第十 清潔	第十、清潔
第十三 謙讓	第五、謙遜

フランクリンを参照しながら我が身をふり返った蘇峰は、沈黙、儉約、勤労、清潔、謙遜が自分にも欠けていると考えたのであろう。しかしながらその性質はフランクリンと異なる。例えば沈黙であるが、フランクリンは「自他に益なきことを語るなかれ。駄弁を弄するなかれ」と生活態度を律するが、蘇峰は沈黙することによってよこしまな言葉が外に出るのを抑え、ゴッドの御心に従うことを目指している。勤勉(勤労)に関しては、フランクリンは「時間を空費するなかれ」と日常生活や仕事面を規定するが、蘇峰は「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい」と信仰生活を規定する。さらに清潔については、フランクリンは「身体、衣服、住居に不潔を黙認すべからず」とやはり日常面を念頭に置くが、蘇峰は「心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る」として心の清浄を目的とする。つまりフランクリンの十二徳は実際の、世俗的な生活における目標であったが、蘇峰の十徳は聖書にもとづいてキリスト教徒としての信仰生活を深めることに焦点を当てている。蘇峰はフランクリンの自己規律に感動しつつも、より精神的、霊的なものを目指した。そうした蘇峰の傾向は一過性のものではない。もともと儒学を受容し、殉国の志士に憧れ、人間の道徳を重んじる気風が強い蘇峰は、精神的なものを求める傾向を一步前進させて聖書に向かい、やがてキリスト教にある程度の距離を置くようになるものの、最晩年は聖書に回帰していくのである。⁹⁴ この蘇峰の性質は、かれが現実的な福沢論吉を尊重しつつも、より精神的な面が強い新島襄に一層の魅力を感じ、終生、敬愛し続けたことにも表れている。⁹⁵ 蘇峰の「聖經十徳」はそれ自体を見ると、表面的には聖書の抜粋にすぎないように見えるが、フランクリンの十二徳を参考にしつつも、それを安易に模倣するのではなく、自己に適った形で聖書のアレンジを行って

94. 蘇峰が敗戦後、幽居の中にあつて聖書を繙読した点は、杉井『徳富蘇峰の研究』56-57頁。

95. 蘇峰と新島、福沢に関する先行研究として、本井『新島襄と徳富蘇峰』の第四章「新島襄と福沢論吉」、第五章「徳富蘇峰と福沢論吉」がある。

おり、そこにかれの精神重視の傾向が浮かび上がるのである。

このことはフランクリンと蘇峰の掲げた徳目の相違点を見ても明らかである。両者の間で共通しない徳目は以下のとおりである。

フランクリン	蘇峰
第一 節制	第一、 神ニ対スル職務
第三 規律	第二、 人ニ対スル職分
第四 決断	第三、 希望責任
第七 誠実	第四、 溫柔
第八 正義	第八、 親切
第九 中庸	
第十一 平静	
第十二 純潔	

十二番目の純潔については、蘇峰は知らなかった可能性が高いため度外視することとして、大きな違いは各自が一番目に取り上げた項目である。フランクリンはあくまで日常の食生活を律した「節制」(飽くほど食うなかれ。酔うまで飲むなかれ)をあげるのに対して、蘇峰は「神ニ対スル職務」(心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛しなさい)を最重視し、冒頭に掲げる。蘇峰はフランクリンの生活面での自己規律を参考にしつつ、それを応用して信仰面での自己規律を企てたのであった。

なおフランクリンは十三徳を実行するにあたって小さな手帳に表を作り、毎日それぞれの徳目に関して過ちを犯したかどうかチェックし、もし犯していれば黒点を書き込むことにした。⁹⁶ この日々過ちをチェックしてノートに書き込むというフランクリンの方法を、蘇峰は取り入れている。当初蘇峰は、聖經十徳に反したときには必ず「朝夕工課」の綴りに「印」を付けることに決めた。⁹⁷ 実際には印ではなく、「今日ハ第一第四ノ罪ナリ」「第二第四之犯罪ナリ」「矢張り第二之欠目アリ」のように文が入っているが、このように具体的な実践方法についても蘇峰

96. 『フランクリン自伝』137-38頁

97. 『資料集』16頁。

は『フランクリン自伝』の記述を参考にしている。⁹⁸

ところで先に述べたように、蘇峰はフランクリンに先立ってピーチャーの『朝夕工課』からインパクトを受けたという。この『朝夕工課』はどのような内容であろうか。同書は一年365日の朝夕それぞれの頁を設け、聖書の一節を引用し、それと関連したピーチャーの教えを解説に付したもので、読者は毎日、朝夕に割り当てられた頁を読むことによってキリスト教的修養をはかることができるようになっている。その一例をあげてみよう。新約聖書のうちキリスト教の真髄を示す箇所として「ヨハネによる福音書」15:1-17があるが、それは、前に触れたように蘇峰がまったくその通りであると同様しながら読んだ箇所(15:2)を含んでいる。この章節の一部をピーチャーがどのように説明しているか見てみたい。⁹⁹

1月24日:朝

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。—「ヨハネによる福音書」15:5

地下牢に閉じ込められた囚人がいたとしよ

98. ここで疑問となるのは、蘇峰がフランクリンの十二徳、自伝をどのようなルートで知ったのかという点である。かれが目を通した可能性のあるアメリカの教科書類を調べたところ、フランクリンに関する記述はいくつか存在するが、十二徳と自伝については発見できなかった。元田永孚が皇后にフランクリン自伝を講じたのは明治8年頃であったが、それ以前の明治4年、蘇峰は元田の私塾で学んでいる。したがって元田経由で知ったこともあり得るが、徳富猪一郎『元田先生進講録』(明治書院、昭和19年2月普及版七版)にその点を述べた箇所は見当たらない。また明治29年、民友社の少年伝記叢書の第一巻として蘇峰が出版させた『フランクリンの少壮時代』(『定本 国木田独歩全集』第8巻、学習研究社、昭和53年増訂版所収)にはフランクリンの十三徳とその実践方法が出ている(ただし十二徳目の「貞節」は少年向けのため説明が省かれている)が、蘇峰との関係には触れていない。その他に熊本洋学校、同志社英学校の教員や上級生、あるいは明治3年に十二徳を紹介した箕作麟祥訳「泰西勸善訓蒙」やフランクリン自伝原書を通じて知った可能性も残されているが、いずれも想像の域を出ない。したがって現時点では、ルートの解明は難しい。

99. *Morning and Evening Exercises*, 46-47. 聖書の訳は日本聖書協会の現代訳による。

う。牢の中には小さな窓が一つしかなく、しかもそれははるか高い位置にあり、日の光からはずれた場所にある。何ヶ月も何ヶ月も、ただの一日でも、その貧弱な小窓から黄色い太陽がたった一条の光でも運んでくる日はない。しかしついに太陽が空の位置を変え、囚人が驚きかつ喜ぶ日がやって来た。一筋の光が急速に流れ込み、壁を照らして揺らめいたのである。かれの心はその揺らめき以上に震えた。この程度のことでも多くの喜びを与えてくれる。光といっても暖かくはなく、わずかばかりのものだが、囚人の心に夏を呼び覚ますのだ。太陽は滅びず、なお空をゆくことを教えてくれるのである。ただ一条の光が野を、木々を、鳥たちを、そして青い大空を語ってくれるのだ!これは人生においてもよくあることだ。神聖な思考力、真にキリスト教的な心の中にあつてこそ、何時間も何日間も光と喜びとがもたらされる。しかしそれは十分なものではない。キリスト教徒が成長ないし向上するためには、落胆して時に期待し、暗黒にあつて時に光に微笑みかけるだけでは不十分なのである。天国のローブが白いのは、主の御顔から輝く光が反射するからである。キリスト教徒は多くの実を結ぶことができる。しかし夏に「つながって」いなければ、それはできない。単なる救いのためだけなら、主の恵みに気まぐれにすぎたとしても効験はあらたかであろう。しかし実り一豊かで成熟した実り一のためには、夏いっぱい太陽の輝きが得られなければ不十分なのである。

ピーチャーは、わずかな光ですら闇に閉じ込められた人間を高揚させるというたとえ話から始め、絶えずゴッドにつながり、その光の恩寵を十分に受けてこそ、人は豊潤な実りを達成できるのだと解説する。この一例に見るように、『朝夕工課』は聖書の様々な一節をピーチャーの言葉で説明させつつ読者に自省を促す。同書の内容それ自体から蘇峰が直接影響を受けた箇所を見出すのは難しい。それよりも朝夕それぞれのページを開い

て、自己の内面を振り返るとい形式を蘇峰が応用している点に着目したい。蘇峰が作った「朝夕工課」の綴りには連日「早朝之祈り」「夜ノ祈り」が書き込まれているが、それは一つには『朝夕工課』の方式を好ましく思い、朝晩二回、ゴッドに祈りを捧げながら自省の時間を過ごすことにしたのであろう。蘇峰はフランクリンに加えて、こうした書物から修養の方法を取り込んだのである。そこにはアメリカ人に敬意を払うだけでなく、その宗教、道徳を受容し、さらに実践することによって自己の体内に染み込ませようと努力する蘇峰の姿がうかがえる。¹⁰⁰ かれにとってアメリカは宗教的、道徳的な模範国であったといえよう。

(3) ラーネッド、ウールジーの学問的影響

蘇峰はフランクリンとピーチャーを通じて修養、宗教面での刺激を受けた。他方、かれはアメリカ人から学問上の影響も受けている。一つはラーネッドによるものであった。蘇峰にとって同志社の授業は楽しいものではなかったというが、その中でラーネッド「先生の教場には、心から愉快を以て出席した。記者〔蘇峰〕をして史学、及び経済学の興味を長養せしめたるもの、先生に負ふ所、決して鮮少ではない。……記者が、コブデン、ブライトの名を聞いたのも、先生の教場であつた」と追想する。¹⁰¹ このコメントに見られるように蘇峰はラーネッドから第一に史学、第二にイギリスの政治家リチャード・コブデンとジョン・ブライトの自由貿易論を含む経済学への関心を触発された。本節では史学の面を割愛し、ラーネッドの経済学についてのみ見ておきたい。また蘇峰は同志社を中

100. 15歳の少年がそうした修養に真面目に打ち込む姿は印象的である。ただし、そこにはある種の努力感がつきまわっていることも否めない。伊藤彌彦氏は蘇峰のキリスト教信仰に関して、奉教結盟事件直後に受けた「心の傷」とコンプレックスから来る反動という側面を指摘しており、これは重要である。伊藤『のびやかに語る 新島襄と明治の書生』第五章を参照のこと。蘇峰がフランクリンやピーチャーの方式をとり入れ、キリスト教を“信じようとした”背景の一つとして、伊藤氏の考察を考え合わせる必要がある。

101. 徳富猪一郎『人物偶録』(民友社、昭和3年10月)64-65頁。

退した後、シオドア・D・ウールジーの政治学の影響を受けている。この点については本稿の考察期間からずれてしまうが、アメリカ人からの学問的影響という面で、経済学と合わせて論じておく必要があるため、あえてとり上げておきたい。

まず、経済学である。ラーネッドは明治12年(1879)より経済学の講義を開始したが、¹⁰² 蘇峰はその授業を日本語に写して「種本」とし、大江義塾で塾生に口授筆記させたと同想する。¹⁰³ ラーネッドの経済学の概要については、その最初の講義原稿といわれるものが明治12年から14年にかけて『七一雑報』に「経済学略説」と題して掲載され、後に『ラーネッド博士伝』に収録されており、そこから明らかとなる。¹⁰⁴ また蘇峰が大江義塾で口授した経済学の概要は、『資料集』に収録された「経済学初歩」より判明する。¹⁰⁵ 両者を比較すると、構成、内容、表現のいずれにおいても酷似しており、自ら「種本」にしたと告白しているように、蘇峰がラーネッドの経済学をそのまま受け入れたことは間違いない。ラーネッドは「貿易の事」「自由貿易及び保護貿易ノ事」と題して自由貿易の有用性を述べており、蘇峰もこの点について「経済学初歩」冒頭で論じている。ラーネッドによると、貿易は国家間の分業であり、一方は自国に適した物を作って相手に売り、他方は国内で産出しない物をより安価に輸入でき、双方の利となる。したがって政府は外国貿易を妨げず、自国民がもっとも得意な品物を産出するよう励ます必要がある。国家間の障壁を取り除いた自由貿易こそが自然の法、国家に大益ある通商法であり、日本は保護貿易を行わないよう注意しなければならない。さらに自由貿易によって「万国ハ情誼相繋ギ相助ケテ始テ其繁昌ヲ増ス」、よって「自由貿易ハ万国互ニ戦端ヲ開ケラ拒ミ平和親交ヲ助ケルナリ」という。ラーネッドは代表的な自由貿易論者コブデン、ブライトの名をあげながら自由貿易とそれがもた

102. 住谷悦治『ラーネッド博士伝一人と思想』(未来社、1973年)198頁。

103. 『蘇峰自伝』152頁。

104. 『ラーネッド博士伝』431-80頁。

105. 『資料集』427-37頁。

らす国際平和の価値を説いたのであろう。同志社時代の蘇峰は「経済者国家之基一家之存亡也矣」、「経済学者曰く、世の進歩に従ひ、工業も自然二分業の有様となれり」といった文句を記しているが、そこにはラーネッド経済学の影響がうかがえ、大江義塾での蘇峰は「自由貿易ハ経済世界ノ真理ナリ」とラーネッドの教えをそのままくり返している。¹⁰⁶

次に、政治学である。明治22年(1889)に蘇峰が口授した「政治学」と題する未刊の筆記ノートが『資料集』に収められている。¹⁰⁷ この「政治学」には「ウールジー氏ノ説ニヨレバ」、「是レウールジー氏ノ卓論ナリ」といった文句が出てくるため、イエール大学総長を務めたウールジーの著作を調べてみると、蘇峰政治学はウールジーの『政治学、または国家』の第1巻第一部「正当な国家の基盤としての権利の原則」、第二部「国家の理論」をなぞっていることが判明する。¹⁰⁸ 蘇峰口授の「政治学」の主旨の一つは、個人の権利は義務を伴うが、国家の干渉を最小限にして個人の自由任せ、地方自治制度などにより人民の間に愛国心と精気が自然と湧き出すように仕向けるのが適切であるという点にあった。それと同一の論旨、表現と文言をウールジー政治学にそのまま見出すことができ、蘇峰が同書の影響を受けていることは明らかである。ただし蘇峰がカバーするのは二巻から成るウールジーの書の四分の一程度であり、例えば共産主義と社会主義についての記述などは除外されている。もっとも蘇峰は立法、行政、司法部などについては「実際政治学ノ部」で論ずるとしており、この「実際政治学ノ部」とはウールジーの第三部「実際政治学」(Practical Politics)に相当すると考えられ、蘇峰がさらに口授を進める予定であったことがうかがえる。¹⁰⁹ ま

106. 『資料集』85、91、427頁。

107. 同上、457-64頁。最終頁に“Political Science”と英文タイトルも付してある。

108. Theodore D. Woolsey, *Political Science or the State: Theoretically and Practically Considered*, vol.1 (New York: Scribner, Armstrong & Co., 1878).

109. ウールジーの第三部「実際政治学」は、第1巻の431頁から第2巻すべてに該当し、全体の約三分の二を占める。第2巻のタイトル、発行所、発行年は第1巻と同じである。

た蘇峰政治学には「リーバー氏曰ハク」の語もあるため、ドイツ出身でアメリカで活躍した政治学者フランシス・リーバーの著作(ウールジーが編集している)を調べてみると、ウールジーほどではないにせよ、やはりその影響を部分的に受けていることがわかる。¹¹⁰

大江義塾時代とそれ以降の蘇峰は、政府が国民に干渉するよりも自由、自治を認めることによって民間の活力を引き出す点を重視したが、そうした見方を裏付ける役割を果たした一書がウールジーの『政治学』であった。ウールジーは、同志社を退いた後の蘇峰に自由と自助の精神にもとづく政治学を吹き込んだ一人であったといえよう。¹¹¹ ただし、ウールジーの著書には政治学の概念的知識が多く見られ、実際のジャーナリズムの世界に生きる蘇峰は、そうした部分をやがて忘れていったことだろう。しかしながら、後の蘇峰の発言の中にウールジーの痕跡を認めることができる。蘇峰は、大江義塾時代はもとより昭和戦前、戦後においても権利には義務が伴い、自由は放縦と異なるという点をおさえていた。¹¹² もちろん、これはウールジーだけから得た考えとはいえないであろうから、その影響を過大評価することは慎みたい。¹¹³ しかし、ウールジーは若き蘇峰に自由と義務の表裏一体性を教えた一人であったとはいえるであろう。

110. 蘇峰が用いた「善政府」「悪政府」の概念は、リーバーの著書に記されたgood governmentとbad governmentを意識して紹介したものである。『資料集』458、463頁。Francis Lieber, *Manual of Political Ethics: Designed Chiefly for the Use of Colleges and Students at Law*, 2d ed., vol.1, ed. Theodore D. Woolsey (Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1881), 317-19.

111. ウールジーはラーネッドの伯父であり、イエール大学時代の恩師でもあった。蘇峰はラーネッドを通じてウールジーを知った可能性があるが、この点については資料が乏しく証明は難しい。ラーネッドとウールジーの関係については、『ラーネッド博士伝』を参照。

112. 例えば、拙著『近代日本人のアメリカ観』155-56頁。

113. 自由が増すにつれて権利も大きくなるが、同時に責任も重くなる、義務なき自由は放縦にすぎないという点はウールジーだけでなく、リーバーも強調している。Lieber, *Manual of Political Ethics*, 383-84.

ラーネッドとウールジーという二人のアメリカ人から吸収した二つの学問、すなわち国際間の自由貿易を重視する経済学、秩序と規律の上に個人の自由を重んじる政治学は、蘇峰の心にそれまでの日本に乏しかった新たなもの、自由の思想を伝えたのである。

4 アメリカへの嫌悪感の萌芽

以上、蘇峰が高貴な精神をもつアメリカのイメージに囲まれながら、キリスト教国アメリカの印象を抱き、フランクリンとピーチャーにならってキリスト教の修養を試み、さらに自由思想の学問を取り入れた点を述べた。時を経るごとに蘇峰の内面はスムーズにアメリカ化していったように見える。しかしながら、ここで疑問が生じる。第一章で述べたように、蘇峰は洋学を学ぶ以前に尊皇攘夷思想に接していた。この攘夷精神とアメリカへの好意的イメージは矛盾しないのだろうか。本来、それは正面から対立してしかるべき性質のものであろう。ここで蘇峰の複雑な心境を示すものとしてまず着目したいのは、熊本洋学校時代を回想した次の文章である。¹¹⁴

予は初めからキャプテン・ゼンスなる者が嫌いであって、彼には何も感心する点を見出し得なかった。それは予が下級であって、直接彼と交渉する機会がなかったためでもあろうが、とにかく予は彼が嫌いであった。今少しく広くいえば、彼ばかりでなく、西洋人はみな嫌いであった。

ジェーンズ邸でのキリスト教集会に参加した蘇峰は、奉教結盟事件で父親から激しく叱責され、棄教を命じられたときにジェーンズに相談し、アドバイスを受けている。¹¹⁵ それを考えると、蘇峰の回想はある程度割り引いて聞く必要がある。しかしながらジェーンズが嫌いであったというのは、一

114. 徳富猪一郎『蘇翁夢物語—わが交遊録』(中公文庫、1990年)262頁。

115. フレッド・G・ノートヘルファー『アメリカのサムライ L. L. ジェーンズ大尉と日本』(法政大学出版局、1991年)275-76頁、伊藤『のびやかにかたる 新島襄と明治の書生』125-26頁。

面において、その当時のかれの真情だったのではないか。漢学に自信のあった蘇峰も、一旦洋学校に入ると初学者にすぎなかった。浮田和民によると「蘇峰君は余り弱冠であつた為めか、或は漢学癖が余り濃厚であつた為めか? 彼のジェーンズは一向君の才能を認めなかつた」と振り返る。¹¹⁶ 蘇峰でなくとも自分を理解しようとしないう教師を心から愛することは難しいであろう。さらに蘇峰は「日本人が、米国人から英語で教育をうけねばならぬことを、子供心にもたいへん不愉快に思」つたと振り返る。¹¹⁷ 先行論考によると、洋学校時代の蘇峰は上級生のようにジェーンズの英語を聞き取ることができず、大変悔しい思いをしたという。興味深い指摘であり、それがジェーンズに対する怒りに転化された可能性がある。¹¹⁸ さらに同志社時代を回顧した文章でも、蘇峰は同じような不機嫌を示している。¹¹⁹

予が同志社に至つて第一癪にさはつたのは、宣教師の態度であつた。何やら彼等が傲慢無礼であるかの如く感じた。これは恐くは予の偏見であらう。概して同志社の教師たる諸宣教師は、人格者が多かつた。他の外人に比して其の人格は、優りてはをるとも、劣りてはるなかつた。併し当時の予は前記の如く感じた。

これは蘇峰が反米的であった昭和戦前に語られたもので、そのときの気持が多分に混入していることを考慮しなければならない。しかしながら、上記の回想だけでなく、同志社時代に記した文章の中にも、アメリカへの不満をうかがえる一節がある。それは前に紹介したアメリカン・ボードからの寄金に蘇峰が感謝の念を捧げた一文である。その中で蘇峰が、わが国今日の文明、聖教、わが同志社、新島先生、教師を与えてくれたのは米国民である、ああ米国民はわが国民の恩人、わが

116. 宇喜多〔浮田〕「少年時代の蘇峰君」1063頁。

117. 早川『徳富蘇峰』9頁。

118. 伊藤『のびやかにかたる 新島襄と明治の書生』121-22頁。

119. 『蘇峰自伝』85頁。

信徒の兄弟であると感激を示したことはすでに見た通りである。ここだけを読むと、蘇峰は「西洋人はみな嫌いであった」どころか、過剰なまでの親米家である。しかし注意して読んでみると、蘇峰はアメリカン・ボードとそれを支えるアメリカ人信者には感謝しているが、同志社のアメリカ人宣教師には真の好感を示していないことがわかる。米国民はわが国民の恩人なりと記した蘇峰はつづいて宣教師に言及する。ここで文章の流れに微妙な変化が生ずる。「彼ノ宣教師輩ハ現ニ其ノ著シキ一分ヲシメタルモノナリ、之レヲ思ハサル可ラス、何ヲ以テカ之レニ報セン。」アメリカ人宣教師輩は日本の恩人の著しい一分を占めているのだ、これを思わざるを得ず、何によってそれに報いようかというのである。「輩」の語に、宣教師に向けた批判的な態度が見えはじめる。さらに文章は次のように続く。¹²⁰

他日如何ナル苦難ニ迫リ、如何ナル事ニ遇フモ、此ノ恩義丈ケハ忘却ス可キニ非ラス、之レヲ報ルノ思ハ一日モ忘ル可ラス、仮令怒リ、或ハ如何ノ事ノ出来ルモ、恩義ハ恩義ニテ忘ル可ラス云々。之レヲ書シテ他日ニ残ス焉。〔下線澤田〕

いかなることに遭おうとも、宣教師輩の恩義とそれに報いる気持は忘れるべきではない、たとえ怒り、どのようなことが出来ても、恩義は恩義なのだから忘れてはいけない、他日のためにこれを書き残すというのである。これを読むと、蘇峰は怒りを感じるであろうと、何が起ころうと、宣教師に対して忘恩の徒になってはいけないのだと自分に言い聞かせている観がある。そこに、蘇峰が宣教師に怒りを覚えた経験があること、その後も複雑な感情を抱き、同志社に寄付をもたらす麗しいアメリカ人と現実の腹立たしいアメリカ人との間で葛藤している様子が透けて見える。そもそも米国民の恩を思うと感泣するとの表現からして不自

120. 杉井『徳富蘇峰の研究』97-98頁、『資料集』所収、100-101頁。

然な印象を与える。アメリカ人信徒への感謝をことさらに奮い立たせることによって、アメリカ人は本来、宣教師のような人々とは違うのだと自己をなだめようという一面があったのではないか。

蘇峰が傲慢に思ったという宣教師はデイヴィス、エドワード・T・ドーン、マーキス・L・ゴードン、ウォレス・テイラーといった人々のいずれかであろう。かれらに怒りを感じた理由としてまず考えられることは、蘇峰側の問題である。宣教医テイラーが監督した寄宿舎の献立は、マッシュなどアメリカ風にアレンジされた栄養食で、日本食に慣れ親しんだ生徒は少なからずそれに苦しんだが、蘇峰もその一人であった。¹²¹ 長男として優遇されて育ち、自分が特別待遇されるのは当たり前で、人並みに待遇されても侮辱された気になるという蘇峰は、¹²² このいわば食物の恨みをはじめとして、自分の思い通りにならない諸々の環境とそれを作り出す宣教師に怒りを向けたことは容易に想像できる。次に、宣教師の側にも問題があったとはいえないだろうか。小崎弘道も宣教師は「傲慢無礼」であるという蘇峰と一脈通じる受け取り方をしている。小崎によると、ドーンはかつて南洋ポナペで伝道活動をしていた、そのため「南洋の裸の島民」や「日曜学校の小供」を教えるような態度で生徒を扱ったと不満気に回想している。¹²³ 同志社女学校の宣教師アリス・J・スタークウェザーは日本を「この奇妙な国」とみなし、熊本バンドの学生は「この滅びかけている国民」への伝道準備をしていると見たが、¹²⁴ ドーンやスタークウェザーに限らず、日本をキリスト教化、開化するために来日したと考える宣教師にとって、日本はアメリカから文明を教わる劣位の国であると解釈されたであろう。そうしたひそかな優越感を蘇峰は見逃さなかったのではないか。

121. 『蘇峰自伝』79-80頁。

122. 『蘇峰自伝』30頁。

123. 小崎弘道「回顧六十年」同志社創立六十周年記念誌『我等ノ同志社』(同志社事業部、昭和10年10月印刷納本)所収、32頁。小崎弘道『小崎全集第二巻 日本基督教史』(原版は小崎全集刊行会、昭和13年10月。引用は日本図書センター、2000年復刻版による)337頁。

124. Alice J. Starkweather to Miss Follock, 5 November 1976, 上野直蔵編『同志社百年史』資料編二(同志社、1979年)巻末所収、「英文資料」163-64頁。

それと似たような優越心は蘇峰が読んだ二冊の地理書、ギョーの『コモンスクール・ジオグラフィ』と『地球と人間』にも表れていた。まず『コモンスクール・ジオグラフィ』は同志社で蘇峰が用いたことが判明している地理教科書である。¹²⁵それは全体を通じて文明人(Civilized People)と野蛮人(Savages)という視点から世界の民族を見ており、例えばインディアンは「二、三の部族を除いて野蛮な状態のままである」とする一方、「アメリカ人は一般によく教育され、勤勉、知性、企業心に優れて」おり、フランクリンの避雷針、電信機、蒸気船など「多くの偉大で有益な発明がかれらによって成し遂げられてきた」と自賛する。東アジアはどのように描かれているかという点、シナ人はかつてもっとも文明化した人々であったが、二千年間進歩せず、それでいて自分たちは世界でもっとも開化していると考え、他の人々を野蛮人と考えて交わりたがらない。日本人は「大変勤勉で勇敢」である、かれらは主として農業と製造業で生計を立てているが、シナ人よりも上手にそれを行っている。「日本人は外見と生活様式はシナ人と大変似ているが、より勇敢、知的でずっと文明化している。かれらは他の黄色人種の国々よりも教育が進んでいる。身分の高い人々は自国語だけでなくオランダ語を学び、オランダの新聞をとり、ヨーロッパとアメリカで何が起きているのかを学んでいる。」このように『コモンスクール・ジオグラフィ』は日本人に比較的好意的であり、その記述がすべて間違っているというわけではないが、日本最大の都市は「江戸」(Yeddo)とされ、着物を着た農民が馬に鋤を引かせながら田を耕している挿絵は日本のみすぼらしさを印象づけるもので、アメリカやヨーロッパについての記述と比較すると、日本は明らかに憐れむべき半開の国というイメージで描かれていた。¹²⁶

さらに蘇峰は、同じギョーによる一層高度な内

125. Guyot's Geographical Series. *The Earth and its Inhabitants. Common-School Geography* (New York: Charles Scribner & Co., 1869). 蘇峰が同書を使用したことは、『蘇峰自伝』81頁。

126. *Common-School Geography*, 27, 29, 60-62.

容の地理書『地球と人間』を読んだが、¹²⁷それは『コモンスクール・ジオグラフィ』以上に人種観念が旺盛であった。同書は欧米人を「高等人種」(the higher races)、それ以外を「劣等人種」(the inferior races)と明言し、白色人種は肉体的に「もっとも純粋で、もっとも完全な人類の型」であるとする。さらに、ヨーロッパ諸国はこれまで人類が到達した中でも最高の知的成熟をとげ、世界のほとんどあらゆる部分を支配し、今後なお征服を拡張する用意がある。それはパワーにおいて第一等であり、地球における満開の花というべき存在である。世界の四つの人種の中でもっとも卓越し、最高段階の進歩にある白人の後に、黄色人種(モンゴル人種とマレー人種)がいるが、それは半歴史的で、褐色人種よりはまだ文明的に優れている。「東アジアの大部分は文化的にこの劣等状態のままにいてることを運命づけられているように見える」が、「われわれ[欧米人]は劣等人種に文明の祝福と楽しみをもたらす義務がある。かれらに可能な知的発達をもたらす義務がある。とりわけ、われわれの荣誉であり、かれらの救いとなるであろう[キリスト教の]福音をもたらす義務がある」という。ギョーによると、世界の秩序と調和はすべて「ゴッドのお考え」によって決定された。したがって、白人の優越と黄人への指導もつまるころ、ゴッドの思召しということになる。¹²⁸同書に表れた人種偏見に強い怒りを覚えた蘇峰は、そのときの感情を約六十年後に至るまで覚えおり、次のように回想している。¹²⁹

私は今から六十年ばかり前に、ギョーの『地人論』といふ書物を読みました、その中に次の様に書かれてあるのを、今日でもはつきりと覚えてをります。

植物は動物の為に存する。動物は人類の為に存する。人類の中でも有色人種は白哲人

127. Arnold Guyot, *The Earth and Man: Lectures on Comparative Physical Geography, in its Relation to the History of Mankind*, trans. C. C. Felton (Boston: Gould and Lincoln, 1869).

128. *Ibid.*, 255, 31, 229, 285, 331, 99.

種の為に存する。

これが即ちアングロ・サクソン人の原理原則なのであります。これを言葉を換えて申しますと、菜つ葉は鶏の為に存するものである。鶏はチキン・カツとか、チキンライスとかになつて人間に食べられる為に存するものである。人間の中でも東亜人は欧米人の為に存するものどといふ議論であります。鶏が人間に向つて未だ曾つて抗議したことがありません。これと同様に、東亜人も一切を宿命の如く心得て、欧米人に抗議しなかつたのは、不思議と云へば、実に不思議なことでありました。

蘇峰はアメリカから輸入された書物を通じて良きアメリカを知ることができたが、その一方でアメリカ人が日本人や有色人種に向けた侮蔑の目をも感じとることができたのである。¹³⁰

アメリカの宣教師や地理書に不満を覚えた蘇峰は、かねてから心に秘めていた排外感情を燃やしたことであろう。同志社時代、勤皇の志士の墓所を巡り歩いたのも、一つにはそうした背景があったからだと考えられる。しかしながら、蘇峰の

129. 徳富猪一郎『興亜の大義』(明治書院、昭和17年9月)57-58頁。なお同書によると、蘇峰がギョーの『地球と人間』を読んだのは、昭和16年(1941)12月18日から「六十年ばかり前」であるという。逆算すると、六十年前は明治14年(1881)12月となり、これは蘇峰が同志社を退学してから約一年半後の熊本時代ということになる。しかしながら、蘇峰が熊本に戻って以降の蔵書を多く収蔵するお茶の水図書館成篋堂文庫に『地球と人間』は見当たらない。それよりも同志社大学総合情報センター(今出川校地図書館)に同志社英学校の蔵書印を押した同書が現存し、また熊本バンドの学生が学科以外に読んだ書物の一つにそれがあげられている(青山霞村『同志社五十年裏面史』、からすき社、昭和6年7月、65頁)ことから、蘇峰は同志社時代に『地球と人間』を読んだ可能性が高い。なお蘇峰のギョー解釈については、拙著『近代日本人のアメリカ観』197-99頁も参照のこと。

130. 正確にいうと、ギョーはもともとスイス出身で同国のニューシャトル大学教授であった。しかし後に渡米し、ボストンでフランス語による講演を行い、それをハーヴァード大学教授フェルトンが英訳したのが『地球と人間』である。その後、ギョーはアメリカに定住し、蘇峰が同書を読んだときはプリンストン大学教授を務めるかわら、『コモンスクール・ジオグラフィ』など児童用の地理教科書を次々と世に送り出し、それらはアメリカで広く用いられた。ギョーの二書はアメリカ人の見方を示すものと蘇峰は考えたであろう。

排外心理は以上のような個人的な体験と理由にのみ由来するのではない。当時の日本をとりまく国際環境を視野に入れる必要がある。蘇峰の愛読した『東京日日新聞』社説は国際情勢を報じて、西洋列強が日本に圧力を加えつつあることを盛んに論じている。とくに同紙はロシアとイギリスの二大列強がアジアに進出する様をくり返し警告し、ロシアの朝鮮併呑の可能性を訴えた。¹³¹さらに明治12年、条約改正交渉において日本の税権回復を約した吉田・エヴァーツ条約が日米間に批准交換された際には、アメリカに感謝と満足を示したものの、反面、「欧州人」あるいは「外人」が「威迫」するため、往々にして条約改正の目的を達成することができないと西洋人への強い怒りを表明している。¹³²このように西洋列強の圧力といわゆる不平等条約の屈辱が日本人の間に感じられる中で、蘇峰は「何焉日本モ十分ノ国トナル様ニ奉願」、自分を「身ヲ以テ国ニ任スル様ニナシ給へ」、「慨然天下ヲ憂へ、与論ヲ導ク之人物」になしたまえとゴッドに祈り、それを「朝夕工課」に綴ったのである。¹³³こうした憂国の精神と気概は、脅威と感じられる他国、すなわち西洋列強の存在を強く意識してこそはじめて湧き立つものである。西洋からの圧力に愛国心を燃やす蘇峰の姿は、同志社を退学し、熊本に帰郷した直後の時点で一層明確となる。条約改正問題に言及した蘇峰は次のようにいう。¹³⁴開港した当初、日本商人は国内の物産を海外に販売する気力と方法に乏しく、座して輸入品を待ってそれを販売するのみであり、ときに貿易上、外国商人と争うことがあっても、居留地を城壘とする外国商人に全勝されてしまった。こ

131. 例えば、ロシアはアジア西辺の蚕食に飽き足らず、アジアの東辺に涎を垂れ、朝鮮を呑み、ついにわが海島に及ぼんとする氣息あり(明治8年11月27日社説)、ロシアが釜山に軍艦をつなぎ、陸路シベリアに達すれば、その軍は海陸呼応してわが国に臨むことになる(11年11月25日社説)とし、またイリをめぐる露清の対立、中央アジアをめぐる英露の対立によって「東方論ノ禍機」がいよいよ迫ると警告した(11年12月25日、12年12月29日社説)。

132. 『東京日日新聞』明治12年6月3日、5月16日社説。

133. 『資料集』16-17頁。

134. 「外国対体論」(明治13年12月25日)同上、112-13頁所収。

れは吾人が多年見かけた所である。このように述べた蘇峰は次のように筆を進める。

是故ニ居留地ヲ存置スル間ハ我権理ト実益ヲ他人ノ為ニ制セラレ、独立ノ名アレトモ独立ノ実ナキナリ、所謂攘夷ノ精神ヲ蓄養シ、富国ノ方法ヲ施行シ、一日モ早く居留地ニテ外商カ専有スル貿易上ノ利益ト勢力ヲ奪取セザル可カラズ。

不平等条約にもとづいて西洋人居留地がある限り、わが国の権利と実益は制せられ、日本の独立は実態なきものとなる。そこで攘夷の精神を養い、富国のための方法を実施し、一日でも早く西洋人が居留地で独占する貿易上の利益を奪取しなければならないというのである。ここで蘇峰は「外商」としか述べていないが、それは要するにアメリカを含む西洋列強の商人を指すと考えられる。蘇峰がアメリカを列強の一員とみなしたことは、上記の文章を書いたすぐ直後に、イギリスなど欧州の強国と一緒にアメリカを非難していることからもうかがえる。その中で蘇峰はペリーの砲艦外交をとり上げ、「軍艦ヲ以テ我国ニ迫リタリ」、これは「吾輩ノ不平トシテ忘ル、不能処ナリ」と怒りを込めて非難している。¹³⁵ かれにとってアメリカは、過去に日本を脅迫したことのある列強の一員であった。このように、蘇峰がアメリカ人宣教師に怒りを燃やした背景には個人の体験だけでなく、より広く西洋列強のアジア進出と日本の主権、国益への侵害に対する怒りがあったと考えられる。西洋に侵される日本という思いがもともと強かったからこそ、宣教師に対しても普通以上に身構えて反応したのではないだろうか。

おわりに

本稿では、蘇峰が同志社英学校を退学するまでの十七年間に、どのような「アメリカ」と出会って

135. 「外国対体論」(明治14年1月上旬推定)同上、137頁所収。註134と同タイトルであるが別稿。年月の推定については同842頁の和田守解説を参照。

きたかを検証した。幼少年期の蘇峰をとりまく世界は、名望家の郷土としての公共心や責任感、家学であり漢学塾でも学んだ儒学に示される君子の道、書物に表れた武士道の人生観、尊皇愛国の精神など、「土」の倫理ともいべき価値観におおわれていた。そうした蘇峰にとって、福沢の『世界国尽』に見られる独立戦争を戦う志士的なアメリカ人、熊本洋学校のアメリカ製教科書に描かれたキリスト教的、道徳的、精神的なアメリカのイメージは、自然に受け入れられるものではあっても、排除や反発の対象ではなかった。同志社入学後の蘇峰は、キリスト教が普及したアメリカ、日本にキリスト教と文明を授けてくれたアメリカという認識を示すようになり、また自由のために独立戦争に献身する倫理性の高いアメリカ人のイメージに再び接し、それらは同志社中退後の蘇峰が示すアメリカ像の中核となった。さらに同志社ではフランクリンとピーチャーから示唆を受け、その方式を応用してキリスト教による修養を試み、またラーネッドから自由貿易を説く経済学を習い、同志社を辞めた後にはウールジの著書から個人の自由を重んじる政治学を学んだ。このようにアメリカから強い影響を受けていった蘇峰ではあったが、一方で西洋列強によるアジア進出や日本の主権侵害という背景の下、アメリカ人宣教師やアメリカの書物に怒りを感じ、洋学以前に接していた排外感情を触発され、同志社退学直後には条約改正問題をめぐって日本人の攘夷精神の養成を唱え、さらにペリーの砲艦外交を屈辱的なものとして非難するに至る。このようにアメリカと出会ったばかりの蘇峰は、一方でアメリカに尊敬と感謝を示し、他方で憤りと拒絶反応を示したのである。

少年期の蘇峰に芽生え始めたアメリカへの敬意は、明治末年から大正以降、アメリカが日本に圧迫と屈辱をもたらす国と痛感されたとき、恨みに変わっていく。そのとき蘇峰は、同志社時代にくり返し唱えた新約聖書の一節をアメリカにぶつけ、アメリカは「汝が欲するところを人にも施せ」というキリスト教の精神を日本に実行しない、アメリカはピューリタンや独立宣言の理想を失ったのだ

と、怒りと失望を表明することになる。¹³⁶ これは、亀井俊介氏が著書でたびたび指摘している近代日本知識人の対米態度のパターンとよく似ている。ただし蘇峰の場合はスタートの時点から、いわば“Ameri-phile”であり、同時に“Ameri-phobe”であった。この混ざり合った不安定な感情は、日米戦争の勃発まで解決されなかったのである。

【付記】本稿は、平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金・奨励研究(A)「日露戦争以前における徳富蘇峰のアメリカ観—その形成と展開—」の一部である。なお資料収集にあたり、イエール大学図書館東アジア部のセレクター・一瀬みつ子氏のご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

136. 拙著『近代日本人のアメリカ観』66頁。